

淨土

新年號



昭和十五年五月廿日第三印刷
昭和十六年一月一日發行

第七卷 第一號

陸海軍 慰問浄土 病

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に二ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に六千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十萬冊以上の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願ひ致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

淨土

新年號

念佛の機は、ただ
むまれつきのまゝ
にて念佛をば申す
なり。智者は智者
にて申てむまれ、
愚者は愚者にて申
てむまる。

法然上人御法語



浄土一月號目次

表紙

扉・目次カツト(漁村ノ略)

井上正春
小島一谿

新春
所感

念佛と奉公……………里見達雄(六)

西園寺公の思ひ出……………吉田絃二郎(八)

病氣と信仰……………和田正系(六)

大原問答の遺蹟 勝林院に詣づ……………佐藤賢順(三)

北方の西方浄土(釋太の思ひ出)……………生田花世(四)

迎年賦……………岩野喜久代(四) 歌壇……………奥謝野晶子選(七)

犬吠岬……………太田耳動子(七) 俳壇……………太田耳動子選(七)

小さな善行……………安井生(三) 柳壇……………西島〇丸選(四)

浄土まん畫……………(六) 京都支局の設立……………(一)



信

仰

相

談

中村 辨康 (五)

寺院
巡り

知恩院に詣で……………細井照道 (六)

上人
法然

和歌註解……………安西覺承 (五)

佛教的臣道實踐……………北條春光 (四)

淨き友
三周年

記念感想文集…………… (英)

童話最後の幸福……………藤井亮傳 (四)

信仰
實話

庵主と佛師……………大島徹水 (三)

阿彌陀さま……………佐藤春夫 (三)

淨土宗
第二組

鎮西上人の生涯……………大野圭道 (六)

編輯後記…………… (四)

一

淨土一月號目次

新發賣

一旦二球で健康量



肝油を精製した
純ビタミンAD

肝油が効くのはビ
タミンAとDの爲
だと判つてゐる今

日、魚油のまゝの肝油で我慢する必要はあ
りません。本品は肝油から精製抽出したビ
タミンAとDを無味無臭のグロビニール球
に収めた快適な製品——肝油の効果は完全
に数十倍に強化され且快適化されました。

合理的な新製品

新製品「研研ビタミン球」は、最近のビタミン學
說に據り、一旦二球づゝ服めば完全に生理的
健康量を満たせる様に、一球ビタミンA五千
D一千國際單位を含有させた製品。しかも
青豆ほどの小球です。

一月量 六〇球 二圓

總代理店
株式會社
玉置商店
振替東京七二番

薬店にあり
品切の節は總代理店へ

品製研理

研研ビタミン球

京都に本會支局を設置

家政高女の職員生徒の奉仕で

會勢伸張のあらはれ

大本山増上寺法主大島大僧正台
下はこれまでも本會のために一方
ならぬ御盡力を賜りましたが、こ
の度更に台下の御肝入で京都家政
女學校内に本會京都支局が設置せ
られることになり、十二月號から
同支局の手によつて京都市内全部
の配本が行はれました。

配本は凡て同高等女學校の職員
女生徒方が奉仕的にやつて下さる
もので本部としてもその點非常に
感謝致しております。今後は會員
擴張、會費徵集等實質的に本會支
局として全權を委任し、全能力を
發揮して會勢伸張に努力して頂く

ことになつておりますので、會員
諸氏に於かれても同支局發展のた
めに御協力下さるやうお願い致し
ておきます。

以上のやうな次第で、京都市内
在住の會員方は何卒、次の諸點に
御留意下さいまして、本會への御
協力をお願いします。

◇京都市内の新入會員御申込、配
本上の御注意、増配の御申込等
は直接京都支局へ（市外の會員
の分は未だ當分本部で直接取扱
ひます）

◇京都市内の會員會費の徵集は二
月頃より支局で取扱ふやうにな

ります。

◇配本は支局の人が直接持参いた
しますので、從來のやうに郵便
では御座いませぬ。

◇支局の所在地は

京都市左京區仁王門通東山線東
入ル

家政高等女學校内

法然上人鑽仰會京都支局

京都に支局の出来ましたことは
上記の通り備えに大島大僧正の御
盡力によるところであります。が、
一面本會の一つの躍進の顯れでも
ありますので、今後共これが生長
發展に本部としても出来得る限り
の努力を拂ふつもりでおりますの
で、會員諸氏にも御支援と御協力
を重ねてお願いいたす次第であり
ます。

新會員のために

見本「淨土」贈呈

一寺院一支部の設立と會員増加
とについて會員並に宗侶各位にお
願ひをしてから未だ日の浅いに拘
らず、支部の新設、新會員の申込
みが殺到し、各方面の御後援振
りには感謝の外ありません。しかし
一寺院一支部の確立と會員十萬獲
得とまでにはまだ到つてゐません
ので、何とかして宗祖上人を鑽
仰いたしたいといふ本會の微意に
御賛同下さり、今後とも倍舊の御
後援あらんことをお願いいたしま
す。尙本會支部規約並に會員獲得
のための見本「淨土」の御必要の
分はお申込み次第でも無料頒
布いたしますから精々御利用願ひ
ます。



新
春
感
念
佛
と
奉
公

法然上人讃仰會長

里 見 達 雄

とうてい表しきれぬ事情にあるのです。

○

茲に紀元二千六百一年の新春を迎へまして、感激一入
新なるものがあります。この二千六百一年は新たな
發足の第一年であります。この年こそ眞の昭和維新の
第一年とならなければなりません。我が國は過去の長い
歴史に於いても、決して暫くも止つてゐたことはなく、
日に進み月に進んで、現在の如き輝く日本を築いて來た
のであります。この昭和十六年こそは、更に一段の飛
躍をなして、舊體制の衣殻を脱して百事更新し、肇國の
大精神を發揮せねばならぬのであります。

南に西に北に東に、今や我が國は數々の重大な狀勢を控
えて、文字通り未曾有の國難に當面してゐるのでありま
して、單に非常時などいふ生温い言葉を以てしては

我が國民が眞に協力して、各人その職域を通して臣道
を實踐しなければならぬのは、申すまでもないことで
ありますが、われわれ日本佛教徒としましては、この際
一層戒心して臣道を實踐し皇謨翼賛に邁進せねばなりま
せん。夙に、和國の教主聖德太子は、日本佛教徒の歩む
べき大道を、十七條憲法の御制定によつて、お示しに
なりました。

私に背きて公に向ふは臣の道なり

といふのがそれであります。銘々が自分勝手に私利私慾
を逞つて動いてゐたり、自分の周りの利益のみを計つて
公益を忘れたるするのは、國を亂るものである、私を捨

て無我の大道に立つて奉公することこそ、臣節を全うする所以である、といふのが太子の御精神であります。太子は「和を以て貴しと爲す」とも「篤く三寶を敬へ」とも仰せられましたが、眞の和は私を滅して公に向ふの

犬 吠 岬

太田耳動子

東のはたてに立てば大初日
星生るゝ静けさのあり濤の冬
月見草の日向を得たり濤の春
地をうつて這ふ菊の花冬に入る
無花果の枝のもつれて冬に入る

でなければ實現せられず、三寶を敬ふとは、佛教の眞の精神たる無我の信念を通して臣道、を實踐することに他ならないのです。職域翼賛といひ公益優先といひ滅私奉

公といひ、特別に新しい事柄ではなく、千數百年を貫く日本佛教の精神で、われわれにとつては誠に親しみ深いものであります。

○

念佛はこの太子の御精神を充分に發揮すべき究極の道であり端的な道であります。法然上人は佛教の根本信念を六字の名號に要約せられ、これによつて、佛教は全く日本化せられたのであります。念佛の聲するところ、そこには些かの私心もなく一つの邪惡もあるべきではありません。佛に歸命する心は、そのまゝに國家に身を捧げる心となつて、田畑に鋤を振る農夫も、織場に紡ぐ織女も、工場に鎚を打つ産業の戦士も、念佛信仰を通して、奉公の誠を致すことができるのであります。

佛徒はいよいよ協力して、この年を一層光輝ある年として、われわれに課せられた歴史的な使命を完遂せねばなりません。

○

新年を迎へるに際し、聖壽の萬歳を祝禱し皇軍將士の御苦勞に感謝の衷情を捧げると共に、われわれ淨土教徒の一段の躍進を誓願する次第であります。



西園寺公の思ひ出

吉田 絃 二 郎

西園寺公も世を去られた。今日は興津から東京への悲しい御歸還と承る。今朝は俄に雪でも降りさうに寒く、空も時雨れてしまつた。

明治、大正、昭和の三時代を通じて偉大な政治家もあり、元勳元老も數多あつたが、西園寺公ほど國民に親しまれ、尊敬された人も少ない。

生れながらの高士であり、貴人であつたといふ點も他の人たちの眞似のできないところであつたであらうが、元々西園寺といふ人は俗界に置くには品が良過ぎた。深山幽谷に清香を薫らす蘭花の趣をそなへた方であつたやうに思ふ。

維新の大變革時代に一朝にして權榮の地に上つた人々は何といつても成上り者であり、野卑なところ

や、惡いところや、食るところがあつた。また堂上人の家柄をほこる人たちには、大なり小なり藤原道長や時平のやうなわがまや、思ひ上つたところがあつた。西園寺公にはその何れの缺點もなかつた。品のいゝところは無類で、恬淡なところは聖僧にも比すべく、人情の厚いところは市井の人も及ばぬところがあつたやうに思はれる。

わたくしは西園寺公には一度もお目にかゝつたことはなかつた。しかし亡くなつた妻の關係からよく西園寺公については聴くところが多かつた。

わたくしの亡くなつた妻は或る關係からして娘時代にしばらく西園寺公のお邸に御厄介になつたことがあり、まだ十五六歳の小娘であつたをりのことで



はあり、すみぶん無遠慮な振舞ひをしては、公を笑はせたことが多かつたやうである。

八九年前のことであつた。わたくしは妻と同道して興津の水口屋にちよつと休憩して、西園寺公の御都合を伺つた。直ぐ来るやうにとの御返事であつたが、わたくしは初めてのことであり、妻だけを坐漁荘に伺はせた。

東京を出る時銀座の龜屋からフランスの葡萄酒を二本おみやげに携へて行つたが、「御前様は、わしは貧乏だからこんな上等の葡萄酒は滅多に飲んだことはいないと仰つしやつた」と妻は話してゐた。

「興津は住み心地がよいところだから、あんた方も興津へ引つ越しておいで」とも仰しやつたと話してゐた。

「御前様も大人で、わたくしも大人になつてお話するなんて不思議でございますね」と妻が申し上げたところ公は「わしは昔から大人だつたよ。あんたが子供だつたのだ」と言つて笑はれたといふことであつた。

その日は東京から見えられた令嬢を連れられて三

保の松原にお出かけになるところであつたさうで、「今日は約束で三保に行く、明日ならばいつでもよいかから二人で訪ねて来るやうに言つてください。今日は悪く思はないやうに」と細々のお心づかひをされて、二階からわざわざ下りて玄關までお見送り下さつたといふことであつた。

わたくしたちは尙一度御殿場おいでのころ御訪ねしようと思つて修善寺から自動車で東京へかへる途中、御別荘の前を通り過ぎたが、その朝新聞に御加減が悪いやうなことを承つたので、御遠慮申してしまつた。わたくしはたうとう一度もお目にかゝらずしまひになつた。

×

数日前不圖妻の箆笥を探してゐると黒地の晝夜帯が眼についた。誰かに妻の形見に贈らうかと思つたが、それはかつて興津にお訪ねしたをり西園寺公から賜はつたものであることを思ひ出し、そのまゝ箆笥の底に藏つて置いた。西園寺公の御病氣のことを知つたのはそれから一兩日後のことであつた。公の御病氣も腎盂炎と膀胱であり、肺炎であつたことも



わたくしの妻の場合と同じことであり、お亡くなりになった日は、恰度わたくしの誕生日であつたことなども不思議に忘れがたいことである。

妻が亡くなつたをり公は御自身御手紙をお認めに
なつて、おくやみの言葉をたまはつた。その御手紙は
は今もわたくしの机中に大切に保存されてあるが、
公はまことに人情に厚い方であつた。わたくしは公
のこの御心に對して妻の句三百ばかりをしたゝめて
お目にかけようと思つて、淨書にとりかゝつたま
ま、つひに御目にかける機会を失つてしまつた。

X

こゝに故人がかね／＼語つてゐた話の中から二三
拾つて來て西園寺公の人間的な一面を書き記して置
きたい。

そのころ公は内幸町の總理大臣官邸においでに
なつたさうである。

冬の寒い雪の夜のことであつた。雪の中を夜更け
て辻占賣がやつて來るのであつた。「淡路島通ふ千鳥
の戀の辻占」と呼んで雪の中を近づいて來る聲を聴
けば、いかにも可憐な小娘らしい。子供心にわたく

しの妻は官邸の窓から辻占賣りを呼んだ。ところが
窓の下にあらはれた辻占賣りは、聲とは似ても似つ
かね大男であつたので、小娘の妻は「あらッ……」
と言つた切り錢を渡して笑ひこけながら引つ込んで
しまつた。公はその後雪の夜、辻占賣りの聲を聴か
れるごとにわたくしの妻に向つて「おい明枝可愛
い辻占賣りがやつて來たよ」と言つてからかはれ
た。

X

公は身嗜みといふ點では流石に垢抜けしてをられ
た。自身銀座へ出かけて行かれては舶來の香水など
をもとめて來られたが、そのたんびに女中頭たちに
「明枝が買つてゐないかね」とたづねられた。女た
ちは「えゝ明枝さんはもう先にそれと同じ香水を買
つて來ました」と申上げると「明枝には敵はぬ」と
いつも笑はれた。一國の大宰相も銀座の先端を行く
ことにかけてはいつも小娘に先を越されて苦笑する
より他はなかつた。

X

これも官邸時代のことであるが、公はそのころ何



かの襟巻をしてをられた。小娘の妻がその御姿を拜見して無遠慮にも「御前様は御隠居さまのやうに見えて可笑しい」と笑つたら「ほんとに可笑しいかね」と仰つしやつたので、「はい」と申し上げた。その冬はたうとうその襟巻をなさらなかつたさうである。

晩年新聞などに、襟巻をなさつたお寫眞が出てゐる毎に、わたくしの妻は「子供のころだつたけれど、悪いことを申し上げた」と言つてゐた。

公のお机のまはりの整理はわたくしの妻が致してゐたさうで、子供心にいろいろの人の手紙がめづらしく小村壽太郎氏あたりの書翰などを、わからずながらいたづらに讀んでは公に「明枝はまた小村の手紙を讀んだろ。新聞記者にでも、この手紙のことを聞かれたら大變だぞ」と笑ひながら手紙を處理せられた。

大森にお住まひのころのことである。そのころは新橋から汽車で行つて、大森驛から田圃の中の道を

お邸まで歩いて行くのであつたらしい。或る時東京から有名な博士が診察のために呼ばれて来た。

わたくしの妻は博士を導いて門番の家に連れて行つた。博士は不審げな顔をして門番の家に上つて行つた。そこには風邪で寝てゐる門番の家内が驚いて病床の上起き上つた。

「わたしをお呼びになつたのはこの御病人ですか」と博士はやゝ不愉快な面持ちであつた。

「さうです」と小娘は言つた。

門番の家内の診察を終つた博士は門を出て俥に乗つた。

その時奥から女中が走つて来て「御病人は奥です」と博士を呼びかへした。

公はその夜東京から大森の別荘にかへつて來られて、その日の出來事を聞かれた。

そして「明枝でなくてはできないことだ。あの氣取り家の××がさぞ怒つてゐたことであらう」と大笑ひなされた。

信仰實話

庵主と
佛師

主法寺上増

水徹島大

三河のある村に一軒の尼寺がある。その尼寺には、寺こそ小さいが實に立派な阿彌陀像がまつられてゐる。この阿彌陀像を想ふ度に秘は、この像が作られた際のいろ／＼の因縁がシミジミと思ひ出されて、多くの人の美しい信仰の力が融け合つて一つの姿をなしてゐるやうにも考へられ、有難い氣持になる。

この尼寺に庵主が續あつて住持となつて來たのは今から十年程前のことであつた。この庵主が寺に來て最初に感じたことは、本尊の阿彌陀像が小さ過ぎるといふことであつた。この本尊さまが在家の佛壇にでも見るやうな小さいことは少なからず残念に思へたので、庵主は本尊さまだけは是非とも立派なものにしたい、一

つ自分が住職である間に何んとかして立派な本尊さまをお迎へしたいといふ念願を發したのであつた。

この庵主は頭がよいとか學問があるといふのではなくて、ごく普通にみる尼さんでしかなかつたが、しかし信仰心だけは實に篤い人であつた。だから本尊さまを立派にしたいといふのも全く無理からぬ願ひであつたし、うまい考へが浮ぶといふだけの頭はないにしても自分の身體でやれることなら何んな骨折りででも樂にやつてのけるだけの努力があつた。

そこでこの念願の達成には先づ最初に本尊を造る資金を集めなければならぬ。庵主には澤山の寄附金を集めるだけの才とでも乏しかつたので、拵鉢行を始めたのであつた。拵鉢行はほんとに僧侶として適切な行であつて、これによつて僧侶としての修養が

出来るものだが、庵主はそれから毎日雨が降つても風が吹いても
たつた一人で軒から軒に村から村にと零細な一錢二錢の喜捨を押し
敷きながら集めて行つた。村の人達

も朝に夕に一日として見ぬことのない
庵主の拵鉢姿に自然と注意するやうに
なつて、それが立派な本尊の縁に預り
たいといふ志しによるものであるこ
とが判つて来て、多くの同情が集つて
来た。こうして人々の關心

が深くなるにつれて、喜捨
される錢高も段々と多くな
つて行つた。

こんな庵主の拵鉢行が五年とい
ふ長い月日にわたつて続けられた。
人の一心は恐ろしいもので積り重
なつた淨財が實に千餘圓の多額に
のぼつたのである。

二

庵主が購いたいと秘かに心の中で描いてゐた阿彌陀像の姿は、
常日頃から語でゐた岡崎市の昌光律寺にある曼荼羅の見事な本



尊の姿であつた。この曼荼羅の本尊にみるやうな立派なものを是非とも迎へたいといふのが庵主の念願であつたが、しかしこ

んな本尊は高價のために恐らく望んでも得らな
いのはあるまいかと考へられ、いろ／＼と思
ひをめぐらせてみた。そしてその結果庵主の考
へついたことは天蓋や台座は名古屋あたりにあ
る安いものにして佛體だけを名のある佛師に彫
刻してもらつたら出来るかも知れないといふこ
とであつた。そして佛體にしても緻さへあれば
洩して思ふやうな立派なものが望めないであ
るまい、努力によつては必ず迎へられるに相違
ないと思つた。

ここまで考へついて庵主は、もうとても堪ら
なくなつて早速に岡崎の昌光律寺に相談に行つ
た。そして庵主は懇心に自分の發願とこれまで
努めて來たことを昌光律寺の住職に説明した。
すると住職もこの庵主の奇特な話に深く感した
のであらう、結局「それならばわしが知人に頼
んで、必ずこれならばといふ佛師を紹介しよ
う」と云つてくれた。庵主はここで思ひがけない有力な後援者を
得たので、すっかり喜んでしまつた。

昌光寺の住職が斯く引受けてくれたのは、その時住職の頭
にフト思ひ浮んだ次のやうな一つの話と、これならばと思ふ佛師
の名があつたからであつた。

名古屋の素封家で有名な浄土宗信者に岡谷といふ家がある。こ
の岡谷家の當主が喜壽の賀を迎へた時に、祝ひのために集つた大
勢の娘や孫達に取圍れた當主が一町の餘を見廻しながら祝ひの記
念として何か欲しいものがあつたら云ふやうにと云つた。すると
娘達はもうかねてから相談でもし合つてゐたらしく、それならば
記念に觀世音像を一應家の佛間に安置して戴きたいと口を揃へて
申し出た。その理由として娘達の云ふには、「私達一族の者が多人
數無事な體を合せられるのも、兩親の信心のお蔭です。家に觀音像
をお迎へ出来れば、私達が里に来るたびに私達の信心を増すやう
な氣がして結構と存じます。」といふのであつた。この申し出を聞
いた當主も大へん悦んで、早速京都の私の住居に來られ、觀世音
像を刻む佛師の世話を頼んで來た。それで私もあれこれと物色し
約半年かゝつて、觀音信者で常に三十三間堂の佛體修繕工の一人
に加はつてゐた田中文彌といふ佛師を探して、田中佛師はまた半
年かゝつて岡谷の觀世音を完成させたのであつた。この岡谷家の
觀世音像を昌光寺の住職が拜んで、住職はこれなら先づ當代に
指を屈する佛師の作として天下に推奨出來ると考へたのである。
庵主に對してキツバリ引き受けたのも實は田中佛師を推薦しよう

と思つたからである。

三

こんなわけで昌光寺の住職が私の所に来て、三河の一尼寺の
庵主が本尊の完成に努力し、その彫刻を田中佛師に頼みたいとい
ふ話をした。私はこの話を聞いて有難い佛縁であるとは思つたが
詳しく話が進むについて私はハタと驚恐してしまつた。それは費
用の點であつた。私は庵主のすぐれた心がけには頭の下る思ひで
一日も早く念願成就に力を添へたいと思つたが、前の岡谷家の觀
世音像が五寸丈で二百圓以上もかゝつたことを考へれば、寺院の
本尊として安置する阿彌陀像の大きさには、恐らく庵主の豫定額
の何倍かを注がなければならぬのであらう。それは出来ない相
談である。だがしかし頼まれた以上は私も何んとかして庵主の望
みを遂げさせたいと思つて半ば引受けるやうに田中佛師に依頼す
る件を承諾してしまつた。

その後私は度々田中佛師のところに足を運んだのであつたが、
いつも具體的な話を進める機会にめぐまれなかつた。するうちに
も三河からは再々問合せが私のもとに來た。遂には駄目なら駄
目で斷念するから、はつきりした返事をよこして欲しいとまで云
つて來た。

四



いよ
いよ
も仕
がなく
なつ
て、ど
うでも
當つて
見よう
と決心
して佛
師を訪
れた。
七月の
暑い日
であつ
た。私
は何ん
と切出
したも
のかと
暫くた
めらつ
てゐた
が、三
河から
寄越
してあ
つた佛
像の下
繪を見
せて思
ひ切つ
て云つ
てみた。

「今日は無理な頼みに来たんだが、この佛像製作については、工賃を私の方からきめたいと思ふが、どうだらう。」

すると佛師はちつとその下繪を見つめてゐたが、やゝあつてそれを拜むやうに歎いて

「よろしうございます。私はお引受けてしまひていただきます。」

と案外にまできつぱりした返事であつた。それでも私が不思議らしく「なぜ工賃も分らんで引受けるのか。」と訊返すと佛師は

「これには仔細があるのです。」

と前置きして言葉をつづけた。

「若しあなたが、もう十日早く私のところにいらつしてこのお話があつたのなら、恐らく私はお引受けはしなかつたでせう。實は丁度十日前に私は出雲の方から頼まれて三尺餘の觀世音菩薩の立像を刻み上げて送りました。その御像をお別れに拜んだ時、こう思ひました。自分は今までに何千體といふ澤山の佛體を刻んだが、こゝいふ大きな佛體を刻んだことはない。それにつけてもこんな大きな阿彌陀像を刻んで數多の人々に拜んで戴くことが出来たらばといふ願ひを起したのです。今日あなたがいらしつて阿彌陀像をお頼みになつたのは、私に對して佛縁を授けて下さつたとも申せませう。私は一所懸命にかゝつてみます。」

そこで私は依頼された佛像についての知つてゐることを全部話をした。そして庵主の心を傳へて、二尺五寸ほどの座像を七百圓

ぐらひで完成させて欲しいと附加へると、「金銭のことはあなたにお任せします。然し期限は受合憎いのです。まあ秋までには御饗だけは出来上りませうから、ごらんなすつて下さい。」との返事。こうした佛師の返事を聞いて、私はほつと腕を撫で下ろして別れを告げた。やがて秋になつたので、再び私は佛師を訪れると、成程佛師の御饗が見事に出来つてゐる。これをみて私は心からの讃辭を呈すると、「いや、まだ駄目です。」と謙遜ばかりでない、明かに不眠さうな色を饗にあらはしながら佛師は訴へるやうに云ふのであつた。

「私は恩賜博物館にある惠信僧都作の阿彌陀佛をうつしたい念願をもつてゐるのです。若し私に運恵や康恵の佛像を眞似るといふなら私にも容易く眞似られると思ひます。しかし惠信には恐ろしくてなかなか近よれません。何故かといふにそれは技巧でなくて信仰の力が籠つてゐるからです。私は毎朝博物館に行つてはそれを拜み、研究しながら自分の作にとりかゝるのです。毎日それを繰返して先づ自己の信仰力を増進するやうに努めてゐます。ですから博物館の守衛が、惠信の佛像を寫眞にでも撮つて研究に資したら、毎朝お出にならんでもすむでせうにと云つて、入場料を拂つても外のををまない私のことを心懸してくれましたが、寫眞に撮つたのでは物がすべて影になつてしまひ、拜見して信仰心がわきあがつてくるやうなことはありません。——このお饗もこ

れから三月ぐらゐる手を加へなければ意に添ふやうには行かぬでせうから、全體の完成はいつになるかわかりません。どうか私の心を察して、私の自由にさせて置いて下さい。その代りきつと恥かしくないものを刻み上げますから……」

私は早速この由を三河に通知してやつた。すると折返し三河の方からも喜んで返事が來た。

それから一年経つた。夏の終りごろそれとなく様子をきくと、やつと無事完成の沙汰があつた。忘れもしない九月二十九日、私は家政女學校の應接室に安置された阿彌陀佛像を一目見たとき、ぐつと感涙の込み上つて來たのを覚えてゐる。田中佛師はその自作の佛像に何度も何度も禮拜してゐた。越えて十月二日、三河からお迎へに來た僧侶に佛師も自ら附添うて佛像を送り出したのであつた。一旦岡崎市の昌光律寺に迎へられた佛像は間もなく檀越の歡迎裡に尼寺に迎へ入れられたのであつた。念願を成就した庵主のよろこびはどんなに大きなものであつたらう。

その後私は田中佛師と變らぬ親交を續けてゐるが、いつも佛師の口邊に「信仰の力、信仰の力、世に處するにはこれ以外の道はない。私も佛師で立つ以上いろいろ技術の點にも腐心しますが、結局信仰の力が最後の鍵を握るものだ」とつくづく思ひました。しかも、自分の力ではまだまだ惠信をうつしきれないのです。」と云ふのであつた。

歌壇

興謝野晶子選

千葉縣 小島 久枝

あわれもたらはれ人となりにつけ
り長き文來ぬこの二月を

許今月は一、二、三位とも、めづらしく
よい抒情歌をもつて占めました。いづ
れも、聲を歌つたものであります。露
露骨にならず、仄仄とした香氣をも
つて、餘韻を引いて居ります。なか
も一位が際立つて優れて居ります。あ
なたから手紙が来ないと、何も手につ
かねるの牢にある囚人のやうだと云ふ
のです。

東京 藤林 貞子

君もわれも暮しけれども一筋のま
ことを胸にたもつ嬉しさ

許これは夫婦と見てもよろしい。お互ひ
に貧しい身分で、華やかなことは何一
つ出来ないうが、誠實をもつて固くむ
すばれてゐる。これは尊い嬉しいこと
ではないか何等の不安なく信じてあつ
てゐる氣持を云つたもの。

徳島縣 武島渡波 爾

今はこれ竹ヶ島なる海人のよき妻
となりし君なりときく

許この歌は失戀の歌です。自分がほのか

に戀してゐた人は、すでに他に嫁して
よき女房ぶりを見せまゐるといふ噂さ
をきいた、結構なことだが少し寂しい
心地もされると作者は諒んだもの。

傷痍軍人島根縣養所 永 海 兵

賑とると無造作に出す衛生兵の選
しき手をしつと見まもる

東京 三野輪 幸節

ひとむらの種すすき光り廣き野の
森のかたに日輪しづむ

品川區 土田 かつ

落葉ふむ音のかそけし更けし夜の
なべての動き止みし道べに

仙傳市 秋月 浩子

うすれ日の射す日此の家に籠り居
て心しづかに物を書くかな

京都市 望月 久次郎

颯々と湖上に月の出でつれど雁來
ぬ冬の浮御堂かな

北支那道 談 達 明 道

山かげにわれ憩ひ居れば音立てて

なくさめ顔に秋風の吹く

茨城縣 伊藤 はる

うらら日やわが家の庭に牛は食み
われは日向に衣を縫ふかな

徳島縣 海部 山人

一葉一葉木の葉のちりて落つる音
きけば澄まる寂しき秋や

徳島縣 丸岡 長壽

十餘り三つにありしかその頃の君
の寫眞を見てなつかしむ

青森縣 丸尾 傳 山

美しく秋の木の葉の散り舞へば天
華のごとく思はれにけり

三重縣 西川 小波

征ける夫に憂ひをかけし子を負ひ
て涙押さへつ 畑を打つなり

姫路市 山本 美代子

願くげこの功徳もて逝きし兒の
魂安かれとわが寫經する

京都市 中谷 こと

秋風にかをりゆかしき木犀のこぼ
るる木間月の照らしぬ

栃木縣 島山 大輪 清

雨止めば前庭遠く露なびき麥の芽
青し一寸ばかり

堺市 笠井 松枝

刈り残る垂り穂の上にときならぬ

花かとまがふけさの初霜

東京 小泉 妙 春

しづかなる朝を祈りて一日を清く
ただしく生きんとぞ思ふ

城西 梓 賴 子

ゆるぎなき御代の姿を大空に青海
原に傳へかしこさ

北海道 花田 順 住

ほがらかに念佛唱へてあら玉の年
の始めをことほぎにけり

小樽市 平井 善 慈

元日や神に誓ひを繰かへす己が心
や子らにはづかし

北海道 寺田 禎 山

驛國の高き嶽さ駿河なる不二にも
まさりかしこかりけり

東京市 妙 仲

たちちねの綱骨終へて香たけば土
黒々としづもれるかな

京都市 福島 孝治 郎

空襲のサイレン鳴りて闇の中街の
しじまを破りけるかな

投稿規定

はがきに一回二首以内とし
「澤土」編輯部歌壇係あて
に送ること。



病氣と信仰

「これより重くそこうくべきに……」の心境

醫學博士

和田正系

病氣は共通でない
所に特徴がある

病名は同じでも 病状は千差萬別

「人は病の器」と云つて如何に丈夫な者でも何時病氣になるか分らない。私は日常、病氣になつた人を治療して居る關係上、病人に就いて日頃感じて居ることを少し申し上げて見たいと思ふ。

一般には病氣といふと非常にはつきりと型にはまつたものの様に考へる人が多い。例へば肺病といへば同じ病状を呈し従つて治療も

同様であるといふ風に大變固定的に考へて居るやうである。従つてたとへば慢性胃腸加答兒と病名がつけば、どの醫者にかゝつても同じ治療をして呉れると思つて居るのである。然し茲で良く考へる必要があるといふのは、實はこの様に何々の病氣といふ所謂病名のついた病氣は實は人間の知識で抽象した所の、實際には存在せぬものであるといふことである。所謂病氣と考へられて居るものは、似たやうな病状を抽象して統一して見た所の、人間の知的產物であつて、謂はゞ一つの作つた型であるに過ぎない。

實際には唯心身の異常を感じて憐んで居る病人といふものが存在するだけである。抽象といふのは知識の進歩の上に必要缺く可からざるものであり、又實際上にも便利なのであるが、その意味を誤ると無いものを有ると思ふやうになり大變な間違ひを仕出かす。似た所、同じ所だけを抽出して統一するのであるから、似ない所、同じで無い所は捨てられて了ふのである。所が本當の個性といふものはその捨てられた所の、似ないが、又は同じからざる方面に在るのである。例へば人の顔を丸い顔、四角い顔といふ風に分類するのは抽象であるが、さう

いふ風に統一して見ても實際にはそれ丈けで、個性ある本當の人の體は分らない。それと同様に病氣でも教科書に書いてあるやうな所謂典型的な病氣なぞは滅多には實在しない。それは何故かと云へば人各々個性といふものを持つてゐて、共通した所よりも、共通しない所に特徴を持つてゐるからである。この個々人の特色、個性といふものが實際上には非常に大きな意味を持つて居るのである。病人の場合でも同様で、例へば風引きの原因は寒さであるといふのは最早抽象された知識で、羅氏何度の寒さで風を引くかは個人々々によつて皆異り場合々々によつて違ふのである。唯寒ければ風を引くと固定的に、型にはまつた考へをすると非常に間違ふ。

現在の醫學は精神方面を忘れてゐる

以上尙云ふ足ら無いのであるが、兎に角病

氣の場合個々の特質を無視して典型的、動きの無い、死んだ考へ方をする間違ひを申したいのである。ところが近代の醫學は所謂實驗的醫學で非常に進歩したと云はれて居るが、研究が大いに進んだ結果一方解剖上の局所的知識に捉はれ、又一方この抽象的にものを視て行く傾向が著しくなつた爲め、段々實際の病人といふものが分らなくなつて、頭の中で作つた形だけの病氣といふものが實際にあるものゝ如く錯覺されて了つたのである。その極端なものは人間を肉體ばかりであるかの如く思つて居ることである。實際今日の唯物理醫學では病人の精神狀態、心理的傾向等といふ最も個性的なものは全然考へてゐないと云つて宜しい位である。どの本にもそんなことは書いて居らない。肉體だけを見て精神的方面を全く忘れて居るのである。人間といふものが事實そんなものであるかどうかは少し考へて見れば分る筈である。

心と身體は人間の兩面、區別がつけられな

い。物と心とは二にして一、一にして二で觀點を異にするによつてこの區別が出て來るのである。然も東洋では古來心は物の主、物は心の容器といふ考へを以て特長とした。この考へ方で無ければ我々は到底幸福にもなれず理想的社會も實現することは出来ぬと思ふ。

狭い實驗室より天地社會が實證する

近代醫學では自然科学といふものゝ當然の行き方として何でも實驗的に證明出來るもので無ければ承認せぬといふ傾向が強い。所が肉體的方面に就ては比較的簡単に實驗出來るが精神方面に就ては實驗は中々困難である。癡に病人の心理狀態と肉體の關係といふやうな微妙複雑な關係になると現代の醫學では實驗證明するといふことは殆んど困難である。人間は勿論動物の一種であるから、動物と共に通した所も澤山ある。その點は動物實驗から

推定出来るけれども、人間の人間たる高等なる精神及び之によつて生きて居る所の人間獨特の生命、人間らしい生活といふものとなると最早簡潔にはならない。然し證明出来ないから、實驗出来ないから存在しない等といふ理屈は許されない。少くも私は承認出来ない。狭い實驗室で學者が實驗證明して呉れなくとも、廣い天地や社會には實に澤山の事實も證明も存在することを私は確信する。醫學上から見て到底助からぬと思はれた病人が治るといふことは確かにあるべき事であるのである。この醫學上かうといふことゝ、不思議な事實とが一致するやうにならなければ醫學は未だ完全で無いのである。

病人の型に 三通りがある

さて病人に接して、その病床生活に於ける心の持ち方といふやうなものを觀察して見る

と大體三種に分類出来るやうである。その第一の人は病氣といふものにすつかり壓倒されて意氣消沈し、煩悶哀愁に堪へず、しつかりとした意志も方針も無く少し病氣が思ふやうにならなければ醫者を頻々と取替へたり賣藥を飲み散したり、人に何か云はれると直ぐその氣になつて何でも無定見にやつて見ると云ふ人である。何でも自分の思ふ通りになれば良いが、少し豫期に反したり氣に障ると直ぐに怒つたり人を怨んだりする。第二の人は之と反對に病氣を征服せんとして非常に努力する人である。これしきの病氣に負けてなるものかと思氣物凄く瘦我慢をする。この心構へは勿論結構であるが執着が熱烈であるだけに煩悶が激しい。戰慄に治る時は良いが少し長くなると迷つて来る。又豫期に反する時は失望落膽が大きく、却つて反動が著しい。

第三の人は病氣に壓倒もされなければ又反對に壓倒せんもしない。即ち意識的に強いてこうしななければならぬといふ方へ方をせず

小さな善行

安井生

東京驛は例によつて混雑を極めてゐた。あの廣いブラットホームを次から次に人の波が押しよせては、又何處かに消えてゆく。私は絶え間のない人の流れを呆然り眺めながら電車の来るのを待つてゐた。

やがて乗客を腹一ぱいにつめ込んだ電車が重さうな騒音をたてながらホームに停つた。どの扉からも押し出されるやうにして乗客が降りて來た。その中で何れも女工かと思はれる十五六歳の少女が二人連れで、仲良さうに話しながら降りて來た。

すると、その一人がフト向きを變へて水道栓のある所に行つた。私は水でも飲むのだらう位に思つて別に氣をとめなかつたが、その少女は水を飲むのではなくて、ゆるんでゐた栓をしめ、後も見ずにスタ／＼

に平然と病氣の爲すが儘に身心を委せて行く人である。而して病氣といふ逆境や肉體のいろいろな苦痛に修養的な意味を見出し、その境遇に獨特の價值と意義とを味ふことの出来る人である。既に病氣になつて自身の不幸も怨まず却つて其處に深いいろいろの恩恵を感じ感謝の祈りを捧げずには居られぬ人である。感謝の生活には貪りや思ひあがりは無い。この様な人は順境にゐても得意の境遇に在つても、貪らず感張らず報恩のつもりで生活をして、自らをいふし銀の如くもの靜かに輝かす人である。

法然上人のお言葉に「されば念佛を信する人は、たとへばかななるやまひをうくれども、みなこれ宿業也。これよりおもくこそうくべきに、ほとけの御ちからにて、これほどもうくるなりとこそは申すことなれ」といふのである。「これよりおもくこそうくべきに……」といふ感謝の心は決して普通の理屈や常識からは出て来ない。之を感じることの出来るの

は唯信仰を持てる者のみである。

「この身には思ひ

患ふことぞなき」

信仰をもてる者は如何なる境地にも有難い感謝の心持ちが起るのである。苦痛は決して苦痛で無い。人間として肉體を持てる以上肉體の苦痛は當然感ずるのであるが、然し尙それ以上の歡喜があるのである。窮極するところ、良ければ良いで有がたく、悪ければ悪いで有がたく、生きてゐる日は生きて居るで有がたく、死ぬ時は死ぬ時で有がたくのである。健康は勿論有がたく、病氣は病氣で有がたい。行住坐臥恩恵を感じ、それに相應はしき生活を営むことこそ信仰をもてる者の幸福では無からうか。

「生けらば念佛の効つても死なば淨土にまいりなん。かにもかくにも此の身には思ひわづらふことぞ無き……」

(終)

行つてしまつた。

澤山の乗客の中には、官吏だとか教育家だとかその他色々の人々がゐて、その少女より前に歩いてゐたのだが、水の洩れてゐるのに氣がつかないのか、氣がついても面朝着たのか誰一人程をしめるものもなく、結局彼女一人がそれを實行したのであつた。

私はこの少女の小さな德行をみて、微笑ましい氣持になつて、そのまゝ電車に乗り、澁松町驛で下車した。

すると私の眼に水道栓がゆるんで、ポタポタ水の洩れてゐるのがうつつた。

私は躊躇なしにネチをしめた。

——私の後に人がゐて、私のこの行爲

はほんの今暫つたばかりの眞似ではあるが、是に私同様の感激を以て、又何處かで眞似してくれたとしたら、そして次々と眞似されて行つたらと一人ではゑむだ。

然し同じやうに悪い行爲も眞似されるのであらうとも考へた。



大原問答
の遺蹟
勝林院に詣づ

佐藤賢順

入瀬を出たバスは、高野の流れを右にし左にして、川に沿ふて大原街道を起る。大分便ひ古したバスの、嘴ぐやうに無理な速力を出すのが、古風な感じで却つて面白い。家数の廻りにどつしりと巡らされた部厚な土塀の所々が崩れかけて、そこへ蔦が絡んで眞紅に燃えてゐるのが見えるかと思ふと、外側がすべて紅殻塗りで、壁だけが白くくつきりと浮き出てゐる家が見える。屋根瓦に赤松の枯葉が幾重にも積つてゐるのを、拂ひ落さないで、そのまゝにしてある家もある。

田中では稲はすつかり實のつて、もう取入れの済んだ所もあるし、今、收穫の最中の所もある。田の畔には野菊が咲き亂れて、赤蜻蛉が枯草へ止つて、じつと陽を吸つてゐる。

比叡の頂が峻しく聳えてゐるほかは、どこも彼處もふつくらとした和やかな風景で、楓葉やうるしは言ふまでもなく、葛も山櫻も見事に紅葉して織繻を織りなすといふ言葉そのまゝである。

櫓が鈴なりに實つて、杞車が悠やかに廻つて、眞の水が靜かに流れて……秋の大原は大和繪だ。
曾て四五年前の五月、赤尾光雄君や佐藤密雄君と叡山の元黒谷の報恩藏・青龍寺に詣で、九十九折の急坂を一氣に大原街道へ下つたことがある。五月で、これもまた繪であつた。

バスの終點で三千院や勝林院の道が右へ岐れる。街道をそのまま眞直に進めば古知谷の阿彌陀寺へ行く。左へ下るのが寂光院道である。右へ上る細道の道端には「右、證嚴阿彌陀如来、圓光大師二十五靈場第二十一番札所勝林院」と刻まれた石の道標が風雨にさらされてゐる。裏に「明和五戊子年九月」の文字が見える。

爪先上りに比叡の山裾へ登る道の兩側は次第に楓や蔦が多くなつて、農家の庭には至る所、櫓が實つてゐる。櫓を取つてはならぬ」と書いた木札が所々に立てられてゐる。「もし一つでも取つたら、あとの代金を皆拂つてもらひます」といふ御念の入つたもの

ある。日曜日に都會から繰り出して来る悪戯者が狼藉をするからであらうか。そんな制札がこの風趣には如何にも不似合なので、廻りに可笑しくなつてくる。幾曲りかして、比叡から落ちてくる呂川といふ細い川へ出て、魚山橋を渡る。この橋を渡つて、もし呂川に沿ふて落葉を踏んで、右へ登れば、昔、良忍上人（應念佛の祖）が聲明律を宣揚して永く聲明樂の本山であつたといふ來迎院の前へ出て、道は急峻ではあるがやがて観山の巖川に至るであらう。

來迎院は歸りに參詣することにして、私は眞直ぐに三千院の門の跡を通つて、律川といふ流れを渡つた。兩側から楓葉が覆ひかぶさるやうに迫る。呂川といひ律川といひ、何れも佛教音樂の音律から出た名前で、來迎院で勤修される聲明が山間溪聲に木霊した有様さへ浮んでくる。律川を渡れば正面に勝林院、左が寶泉院、右に西林院と鐘樓とがある。この外、一二の堂宇があるが、このうち勝林院が一番大きく、それぞれが獨立の一院の名を持つてゐるけれど、配置から言へば、勝林院を本堂として他はこれに附屬した塔中のやうな配置である。

來迎院に残る法藏應三藏の古文書などによると、來迎院、建威院、勝林院、往生極樂院、寶泉院、西林院その他合せて八ヶ寺が一山をなしてゐて、これを魚山太原寺と稱へて、來迎院がその本山であつた。こゝでちよつと、魚山太原寺と三千院との間柄につい

て述べてをくと、三千院は應仁の亂以後、舟岡山から現在の地に移されたので、それが古くから天台宗の門跡寺であつたのと、地城から言つても一山の中央に位してゐるのとで、魚山一山の本山であると思はれてゐるが、實は系統は違ふので、來迎院にしろ勝林院にしろ慈覺大師の開基と傳へられてゐる。

勝林院は法然上人が眞實法印と悶答をした所で大原院等の遺跡として名高い。宏莊な堂宇がどつしりと聳えてゐるが、この建物新しい、一見して江戸末期のものである。幾念なことに勝林院は享保二十一年に炎上して、現在の建物は安永七年に再建されてゐる。從つて恐らく、堂内安置の本尊も、法然上人御自作と傳へられる木像も、その火災以後のものであらう。然しこの寺に纏はる物語は古い。

慈覺大師の開基といへば話は今から千百年近く前の昔へ遡る。慈覺大師が入唐して五台山から法を傳へて歸つたのは、承和十四年であつて、そのうちには弘明阿闍梨經、弘明念佛の行法があつた。何時の頃からか定かではないが、勝林院はその弘明阿闍梨經の道場であつたと傳へる。

寛仁年中（紀元一千六百七十七年頃）寂滅法師が中興したとも一説には寂滅が創建したのであるとも傳へる。それから間もないことであらうが、こゝで覺超と遍教との對論があつた。覺超は恵心僧都に兄事した都率院の學僧で、その學解は比叡一山に聞えた

高僧、顯密に就つて多數の述作を遺してゐるし、遍教も覺運僧正に師事して教觀の二門を究めた靜慮院の學匠であつた。

靜慮は法華八講の時行はれたので、その主題は佛果は空であるか不空であるかといふ極めて稜而上義的な難しい説義で、法華二百題のうちの一個であらうか、覺超が慧心院流を代表し、遍教が覺那院流を代表しての、當時の學派の對論であつたであらう。本尊丈六の阿彌陀佛を中にして、覺超と遍教がそれ／＼八講壇に登座して向ひ合つた。兩側には多數の學僧が居並んでこの對論に耳を傾けてゐた。靜慮は何時果てると思はれなかつたが、本尊の阿彌陀佛は遂に跌座した左の膝を崩されて、立上りかけて覺超・遍教のいづれにも辟せず、中道實相の義を示されたのでこの對論の片はついた。それ以來、この丈六の彌陀を「證據の彌陀」といふのであると、バスを降りた近くの道標に「右、證據の阿彌陀如來」とあつたのは、その物語を傳へるのである。

さて、それだけのことを心得てをいて、法然上人と顯眞法印とがこの證據の彌陀の前で問答をせられたことを偲ふならば、一層に興味が深いではないか。

私は案内の人に從つて堂内に入つた。往時を偲ぶに足る丈六の彌陀は、金色燦然と端座し、在す。がこれは、寺傳によれば、元文二年（紀元二二九七年）に佛師喬義が改作したもので、その改作がどの程度のことを意味するかは明かでないが、この年は堂宇の

炎上した享保二十一年の翌年であるから、それから想像して恐らく全く新しいものではないかと思ふ。

「焼ける祇の本尊様は左の膝を少し上げて立ちかけてゐたといひます」

と案内の人が語る。

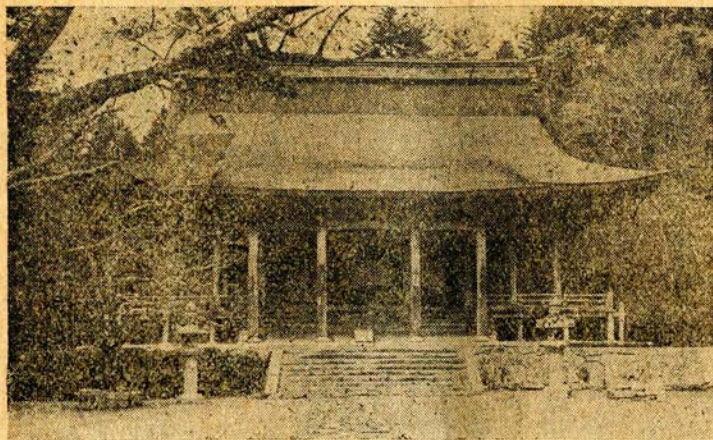
確かに上品上生の印相であつたと記憶するが、結んだ指から杖堂正面の格子戸まで義の繩が引かれてゐて、今も來迎院、勝林院、大長嶺の三部落の者の薙髪には、壇内入口の來迎櫓といふ小さな石櫓の所から、これに善の繩が結ばれて、迎接の儀式が行はれるといふのも面白い。この繩に觸れる者は、如來の御來迎に預つて來世往生の宿願が結ばれるのである。

本尊を中にして兩側には、これも火災以後のものであらうが、八講壇が置かれてゐる。

「左に法然上人がお坐りなまつて、右に顯眞法印がお坐りになつたのです」

「上人行狀繪圖」の大原問答のくだりには、八講壇の繪はないが幸では兎に角さう傳へてゐる。

上人には東大寺の大勧進で各高い俊乘房重源はじめ三十餘人の弟子達が隨從し、法印の方には觀山の碩學、大原の聖達が數多く聽聞に來てゐた。その他に名の知られてゐる諸宗の碩學も多數傍聽した。それがずらりと兩側に居並んだのである。



寫眞は勝林院

文治二年（一八四六年）の秋、上人五十四歳の時で、淨土開宗の時から十二年目である。顯眞法印は五十七歳であつた。大原問答はどうして開かれたか。顯眞法印は、後に天台座主になつたほどの人

で、學問として顯密諸教を究めること甚だ深かつたが、最も重要な一點、生死解脱の直路についてはまだ確固たる信念を握んでゐなかつた。學問と修行との中間を彷徨してその頃の時代人に共通の深奥の苦悶に悩んだ人であつた。四十三歳で凡ての官職を辭して大原

へ籠居してから、四ヶ年になつたが、この苦悶は解決されなかつた。名利の學道をのがれ籠居すといへども、決定出離の直路、思案いまだ一決せず」と書かれてゐる通り、晝夜に苦悶を續けて、色々の行法へと走つてみた。然し地位や傳統や學識が災としてあらうか、どうしても大切な飛躍が一つ出来なかつたのである。果敢にこの飛躍をやつてのけた法然上人專修念佛のこともかねがね聞いて、可成りその方へ氣は誘はれてゐた。この惱みを同じ法流を汲んでゐる永辨法印と語り合つた時、永辨が「さういふ事は法然上人にお尋ねになつてはどうか」と言つたので、これが機縁となつて、上人が比叡へ登られたを、鮮明に出離の道についていろいろとお尋ねをすることになつた。上人は「自分としてはいさゝか考へてゐることもあるが」とまづ柔らかに受け答へられ、成佛と往生とを分けて、成佛は難いが往生は易い、念佛さへ申せば觀想の凡夫でさへも如來の本願の力によつて、淨土に往生することができると仰せられた。法印は然しこれには満足できずして黙して語らなかつた。上人からもその時はそれ以上言葉がなかつた。法印には成佛から往生への飛躍がやはり受け容れられなかつたのである。そして後になつて「法然房は智慧の深い人であるが獨斷的な所がある」と或る人に語つた。それが何かの便りに上人に聞えと、上人は「自分の知らないことは必ず疑ふものである」とお話しなされた。世間にもよくあることだ

が、これがまた法印の耳に入つた。然し法印は流石に立派であつた。法然房でなければ誰がかりした言葉の口にできよう」と大いに自分を恥ぢて、それから百日の間、大座に籠居して眞劍になつて淨土に關する典籍を披閱した。一通り淨土關係の聖物を讀んで準備ができると、すでに淨土の法門をこそ見立て侍りにたれ。來臨して談せしめ給へ」と挑戰したのである。

法印が秘かに如何なる意圖を持ち、如何なる觀點から專修念佛を衝かうとしてゐたか、またこの百日間の讀書三昧が法印をどれほど念佛の理解へと導いたか、それは知る手掛りがない。然し事態は意外に重大であつて、山門の學匠ばかりでなく、讃岐の眞學もその席に列するのであるから、その談義の結果は上人の眞佛敎訓に強く影響することであり場合によつては、新宗の宣言が概抵から覆へされることにならないでもない。

論議の往復は一日一夜に及んだ。上人は法相、華嚴、法華など教義、修行の方軌、解脱の有様などを詳細に述べてから淨土敎の本義を宣明せられた。

「これら聖道門の敎宗が優れてゐることについては少しも疑ふものではない。人間と敎とが相應してあれば何人も得脱することは疑はない。だがこの時代の人間の力を考へてみるならば、人間とこれらの敎とが全く相應してゐないのである。現實の人間の力に即して、有智無智、持戒破戒、凡ての人間を救ふことのできるの

は淨土の一門あるのみである」

と深い人間理解に基く所信を義を極め言葉を盡して述べられた。

その結果はどうであつたか。法印、香爐をとり、高懸念佛をはじめ、行道し給ふに、大衆みな同音に、念佛を修すること三日三夜、聲、山谷にみち、ひびき秋野を動す。僧を起し繼を結ぶ人おほかりき」といふ。

法印は翌年の正月には勝林院に五坊を立て、一向稱名の道場とし、自ら不斷念佛を修したと傳へる。

私は境内の茶店で榎を食べながら、その頃を回想して山を見上げ樹々を見上げた。

歸りかけて境内を出ると、出口に熊谷遊生坊の腰掛石と鏝捺の簀といふ露石を見る。この法論にもし上人が敗れるやうなことがあつたら、一撃の下に樞手を倒してやらうと、秘かに法衣の袖の下に鏝を忍ばせてお伴をしてきたのを、上人に見破られて、心憎し氣にこの簀に捨てたといふのである。事の眞偽は別として、武人眞實の性格を傳へて證如たる物語である。然しその簀は、近年取り壊されて殆んど跡方がない。

歸途には往生極樂院と來迎院とに參詣した。人影の全く途絶えて、たゞ落葉が風に鳴る外は音一つ聞えない中に立つて、紅に燃える楓葉に覆まれた常行三昧堂造りのなだらかな屋根を見上げてゐる時の感懷は、永く忘れることができない。



豊後島 豊後島 吉野法泉

此の島の社神も神の留守

評 「神の留守」とは八百萬の神々が十月になるとう出雲の大社へ集つてゐる爲に留守になるのを云ふ。神無月とも云ふ。

句意は、お宮の普請をしてゐるのも神の留守らしいといふので、如何にも神の留守らしい句である。

今治市 三木光子

栗飯や休みなき夫いたはりつ

評 どういふ職業にたづさはつてゐるのか知らないが、休日なく忙しく働いてゐる夫に對して、何か申譯がない思ひをしてゐる奥さんが栗飯をつくつて其の勞をねぎらつたと云ふので、奥さんの氣持が切實にあらはれてゐるところがよい。

名古屋 堀場曲雄

よりこのみして唸りをり菊の蜂

評 脚長蜂が菊の花から花へ喰りながら飛びまはつてゐるのを見て之は花のより好みをしてゐると見たのである。其の主観的な見方が面白い。

香川県 日向法月

穀の香を放ちて留守居なかりけり

茨城 石田定純

提灯の赤き寒さとなりけり

御島縣 丸岡長壽
お茶咲いて花粉たゞよふ風日和
同 油部山人

大櫓木の葉こぼせる淋しさよ

堺市 笠井松枝

蝶のふみしだかれて秋深し

小樽 平井善慈

子等乗せてまた漕ぎ出でぬお元日

東京 妙仲

柿うれて故郷の家古たりけり

長崎 池田三

秘栗の笑みては栗を落しけり

姫路市 山本一音

子と拾ふ貝美しく濱小春

仙臺 秋月浩子

水仙を活けて今朝の寒きこと

栃木 萬壽云海

小夜霧を渡る一燈近づきぬ

名古屋 土肥春義

辻の朝焚火に人はあくびして

埼玉縣 吉田富一

露更けて手摺冷たき別れ哉

山梨縣 程原幸造

御代の春漁村をめぐる海ひろく

栃木 大輪清

灯が消えし家根静さに木の葉ちる

東京 森田法免

稻架の列重ねて小田の暮るなり

京都 山田翠舟

荒海の星の亂れて肌寒し

北海道 花田顯佳

子寶の榮えを祈るや國の春

大津 谷上賢二

焚火して白髪之母の坐をつくる

山梨縣 程原津谷

曙の太刀の光りや寒椿古

青森 丸尾輝山

行僧の聲音かけけり秋の風

東京 筒野典子

三日月の青くかりて杜松の花

名なし 草

木枯や狐火かとも森の中

京都 鈴木白舟

起重機が音が重たき秋の雨

大分縣 石堂柑山生

母上の足袋纏うて夜もすがら

門司 いろは生

戦ひの果てしも見えず秋深む

滋賀縣 美船波路

客僧に侍りてホ句のこと夜長

大阪市 森正義

バスを待つ暇落葉とともに在り

北海道 加藤潤蔵

秋草の西日ほのくあたへかし

大阪府 日根野谷紀三弘

佗びしきは萩野の蝶にふと語る

東京 三野輪幸節

虫なくは秋の日あつき隣り山

同 妙仲

寂として戸隠山の紅葉かな

大分縣 石堂柑山生

飛びもして蝶も草と刈られけり

京都 福島孝治郎

燈火管制人影もなく流れ星

仙臺市 中村幸子

時雨去り小唄やえたり温泉町

名なし 草

投稿規定

官製はがきに一面二句以内とし「淨土」編輯部俳優係あてに送ること。



郵便局の子供

「雪だるまなんか
おかしくつて……」

(志賀原廣次)



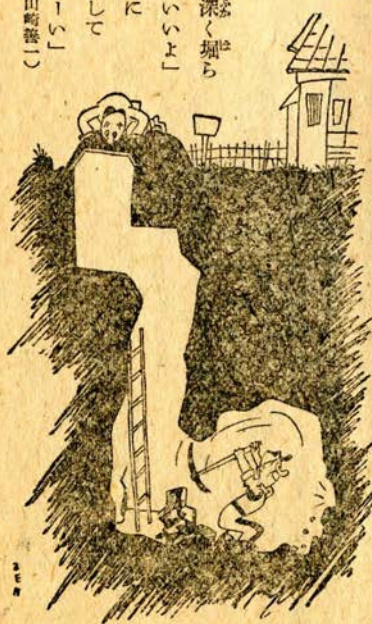
國策

防空壕

「オーイ
そんなに深く掘ら
なくてもいいよ」

「ついでに
金鑽を探して
あるんだーい」

(山崎義一)

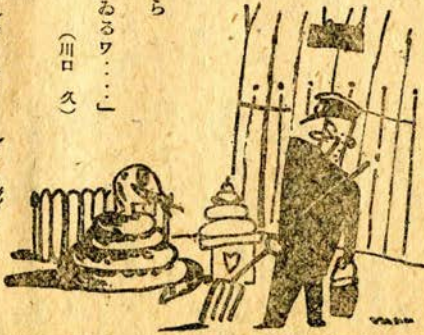


祝巳年

「ハハハア

鏡餅を供へたら
同じ恰好してゐるワ……」

(川口久)



鏡餅新體制



mnh

看板屋さん

の書初

「急ぎのがあるから俺アこれにするよ」

(川口久)

羽根つき

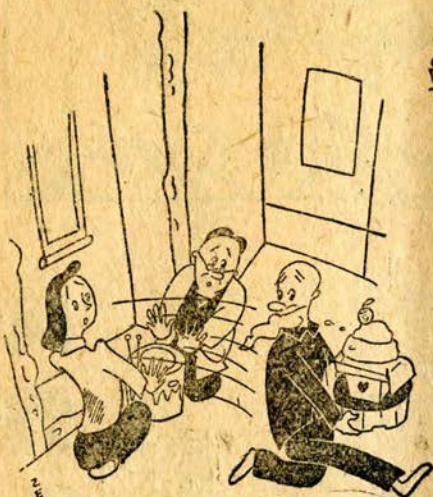
「お父ちゃんに墨をぬつたら……オメンネ 蔣介石みたいになつちやつた」

(をき原賢次)



「オイ、火鉢をそばに持つて来ては駄目だよ。雪で作つたんだから……」

(山崎善一)



ZEN



Kame



(五)

阿彌陀さま

淨土には悪いものなし
優れた修養と理想のお國

佐藤 春夫

佛さまになる方ばかり

淨土、阿彌陀さまのお國は、この上なく莊嚴なところに開かれて阿彌陀さまや觀音さま勢至さまなどのお慈悲と力とが國中くまなく行き渡つてゐる上に、その國の空氣や木の葉をゆり動す風の音にさへ佛教の教へがしみこんでゐるといふ事はもうお話ししたとおりですが、それではそんな

國にゐて衆生、その國に生を享けてゐる一般の人々はどんな有きまで生活してゐるのでせうか。その文化の狀態はどんなでせうか。

ここには地獄や餓鬼道、畜生道などといふやうな所は一つもありません。淨土の人々は悪い事は一つもしないで生きられるやうに出来てゐるのですから、惡の報として墮ちる地獄や餓鬼、畜生などの必要はない筈です。犯罪人のない國には刑務所の設けはない道理です。そればかりか淨土の人々は死後でもよその佛國の地獄や餓鬼道畜生道などへ墮ちることは絶対にないのです。それ故一度淨土に生れた人はやがて佛さまになるばかりといふわけですから。

淨土の人々も壽命といふものはあります。けれどもこれは人々の望み次第に延したり縮めたりすることが出来ることになつてゐます。それでは誰も彼も何百年も何千年も生きてゐたいだらうと想像をするかも知りませんが、それは

持つて生きてゐるのですから。

優美と才能と健康を兼備

我々普通の世界に住んで普通の人間の常識を基にするからさう考へられるので、佛教の教義で育てられて生きてゐる淨土の人々は早く成佛することを望むに違ひないとは思はれますが、いつまでも生きてゐたいといふ貪慾な氣持は無ささに思はれます。この上なしに結構な淨土にゐてさへ

壽命の短いのを希望するといふ途方もない人がゐるらしいのはこのためです。何にせよこの國の人々は我々にはとても想像も出来ない世界のなかで、想像も出来ない思想を



この國の人々はこの國に生れる前は、我々が母の胎内にゐるやうに大きな蓮の花の苔のなかに閉ぢ籠められてゐて、その花が開くと一しよに淨土に生れ出て來るのです。その神聖な清らかな花の苔のなかにゐる間に我々普通人のさまざまな賤しい欲を清められて、この不思議に立派な國の人となるに適當な性質につくられてゐるものと見えます。

かうして生れ出たこの國の人々は全身金色をしてゐて男女の區別がないばかりか、どの人々もみな同じやうな立派に美しく、美醜の差別はありません。三十二大人相を具

へて全身申し分なく端麗につり合ひがとれてゐるばかりか天上の力士那羅延のやうに壯健で大力です。この理想的健康體の上に智能はあらゆる眞理を知り、またその眞理を述べる場合には思ふところを言ひ盡せないとところのない雄辯の才を持つて居ります。辯舌ばかりでなくいろいろな才能を恵まれてゐるなかで特別に擧げられてゐるものは、天眼智といつてありとあらゆる諸佛の國々を居ながら見る能力や、天耳智といつてありとあらゆる諸佛國の佛説を居ながらにして聽いて楽しむことが出来るとか、自分の宿命や他人の心のなかを見抜くなどの能力さへ備はつてゐるのです。また神足通といつて諸佛を供養する目的なら食事をする位のごく短い時間に諸佛國をすつかり一まはりして來ることも出来ると言はれてゐます。つまりは修養の足しになることならば何でも、居ながらに見たり聞いたりすることもあるといふわけで、テレビジョンやラヂオと同様でそれ以上に精妙な機能が淨土の人々の體のなかには具はつて生れつゝいてゐるやうなものです。稻妻のやうに速い飛行も出来るのです。しかしそれ等の才能がみな佛教の教へのための修業にだけ使はれ發揮されてその他の場合には妄りに使はれるものでないのです。この國のすべての文化を擧げ

てどこまでもこの國の肇國の精神に基づいて發達してゐます。そこにこの國の特有の文化があるやうに見えます。人は智能と健康とをこの上厚く恵まれてこの特有の文化に浴しつゝ刻々に成佛の修養を積んでゐます。

優れた淨土の衣食住は

本來は精神的な國ですが、人々が住んでゐる以上は衣食住に關するこの國の事情も多少は知つて置きたいものです。氣候はいつも穏和で春秋夏冬なく、寒からず熱からず常和調適といふからいつも人々に快いものやうです。それでも國中の人々が衣服の必要を感じた場合には直ぐさまこの國の體制に適つた衣服が自然に身につけられる。これは格別に裁縫したり、洗濯したりするのではないのであるといふ。希望に應じて相應の國民服が支給される制度でもあるもののやうです。住居は、まるで宮殿のやうな上に、衣服飲食もろもの妙華香莊嚴の器は、さながらに天界でも最もすぐれて美しいと言はれる第六天の自然の物に似てゐます。もし食べたいと思ふと七寶の食器が自然に目の前へ思ひのままに現れて來て、さまざまな御馳走が食器



の上に乘つて來るのです。この食物があるけれど、誰も食
べるでもなく、その色を見、香をかいで、食べたと思ふと
もう食欲が満足します。食欲などもごく淡泊になつてゐる
のでせう。食べもしないで飽食すると食器は自づと消えて
行つてしまふ。時刻になるとまた出て來ます。この佛の國
は萬事清らかに靜かであらう言はれない樂しさです。人間の
いろいろの欲心がよく調和され節制されたからでありませ
う。さうしてこの國で快樂といふのも、たとへてみると一
日の仕事を終つた夏の夕方一風呂浴びて、ゆかたを着かへ
た時のさつぱりと爽かな氣分に似たやうな性質のものと思
へばよろしい。

筆者白す「阿彌陀さま」ははじめ書きこなつてしまつたため
に途中で非常に書き慣み文章なども時々調子が違つてしまひま
した。何れすつかり書き直しますが、今度は法藏菩薩、阿彌陀
さまがまだ佛さまにお成りなされない以前の事をもつと詳しく
書くことにしませう。

さうしてこの「阿彌陀さま」の稿は出来そこなひのままでこ
れでおしまひにします。



佛敎的臣道實踐

北條春光

日頃敬愛して居る一友から時觀に關し拙稿を求められた。國家を脊負ふて立ち行く青年と接しつゝ勉強して居る私にはいつも自己修練と云ふ事と信念の堅持と云ふ事とが自分の念頭を離れない。宏大な氣宇と感激に充ちた熱情とは青年にとつて不可缺のヴィタミンでありホルモンである。この意味に於て私は維新の頃の佛者の意氣に接するの現代人にとつて他山の石となると思つて居る。敢て拙文を物して責を果す所以である。

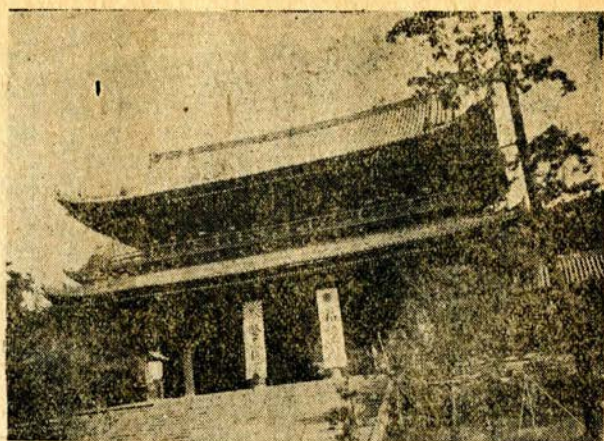
先達歸山し古い佛書の藏してある破れ本箱を覗いて見て居る内に蟲喰い和緩の薄い本が目にとまつたので持參して座右に置いて居る。題して『童形用心大略』と言ふ。時恰も蕃船來つて近海にあり衆心安きを得ざる日の嘉永五壬子の年秋である。著者が知己公人特に旗本子弟の爲に之を草

したとある。今日の世態とは勿論その趣を異にし、特に幕府旗本子弟に對して説いたものであるから忠義を將軍に盡す様に勧めて居ると言ふ様な點に多少考慮を要する點ありと雖ども一貫せる臣道實踐の規範に至つては何人と雖ども同感する所である。全編漢文體で十五章からなつて居る。この本は讀む本でなく行の本である。論語の如く經典の如く取り扱はれたものに相違ない。旗本子弟が机に座つて講義を聽聞して居る様が彷彿として來る本である。そして私が敢て此處に引用して來た所以はこの本の道德の中心に佛敎を持つて來て居るからである。單なる道德でなくその奥に信仰の裏付けがある所に力が生かされて居る。無常を述べ因果を教へ三寶を説き佛果を嚮して居る。人命は無常にして因果は車輪の如く惡を造らば獄に墮し善を修すれ

ば天に生じ勝果を得る。忠を盡し國に報ずるは善の最上であると言ふのがこの一本の結尾となつて居る。第一章では天地を敬拜する事を説いて居るが誠に首尾一貫して居るものである。天地は惟れ萬物の父母宜しく日日夜夜敬拜して天恩を報じ奉れと言つて一一拜禮を規定す。拜禮すべきものを數ふ。日を天子に月を皇后になぞらへ神佛諸恩人兩親の恩徳に感謝報恩を誓約する所から一日の行動が開始されるのである。男子のみならず女子の教養の點に付き述べる所ないとか考へられる。特に私の感じたるは女子を家の寶と爲す考へ方である。女子にこの自負ありてこそ立派な子弟の教育が出来るのではなからうか。最後に臣道實踐と言ふ見地から十五章中の三章を擧げて拙文を終り度いと思ふ。その三章とは即ち家業事務章第十三と武事要章第十と遇民用意章第十との三である。この外にも勿論仕官盡心章と言ふ様な簡にして要を得たる吏道の眞髓に觸れたものがあるが前記三章を擧げれば大意を盡し得るからである。前記三章中私の最も肝に銘じたものは高民その職能を通じ業を勵む事が國に盡す所以でありその思想は三賢の説から出發して居ると言ふ點である。之が家業事務章の用心

である。遇民用意章では官と民との關係を根本的に譬喩を以つて説き官のものが民を離反せしむるはその子を賊する様なものであると言つて居る。現代の吾人の猛省すべき點である。武事要章には文武の關係を述べて武の必要なる所以と用武の用心を教へて居る。例へば火砲の銘には此の火砲發する所憤まん哉人の獸に變ずるを驚し國の爲に災を讓くと言ひ又力銘には容此の寶劍徳用神の如し天に代れば國を治め妄りに弄べば身を亡すと誡めて居る。私はこの本の講義を聴聞したであらう旗本の子弟が如何に自己を反省し、自分の氣宇を濶大にし身を國家の重きに任じ様と決意したかその詳細を知らないが少くも當時の旗本子弟に豊かな心の糧となつたものがあつたらうと想像する。現代の青年に道徳はある。然し一部に限られたる者を除いてその道徳を裏付ける信仰が缺けて居る様に思はれる。些事は別として興亞日本の指導原理である臣道實踐は決定的な大道である。この大道に對して佛徒の盡すべき協力こそ信仰の裏付けではあるまいか。

(筆者は九州帝大醫學部教授、醫學博士)



(寫眞は三門、樓上正面の勅額「華頂山」は靈元天皇の御宸翰である)

布園被て寝たる姿は古めかし起きて春めく
知恩院の其樓門の夕暮に……秋は色増す華
頂山、時雨を賦ふ唐傘の……
『京の四季』の一節を口吟みながら今日も亦

◇…著・名・寺・院・巡・り…◇

總本山華頂山

知恩院に詣で

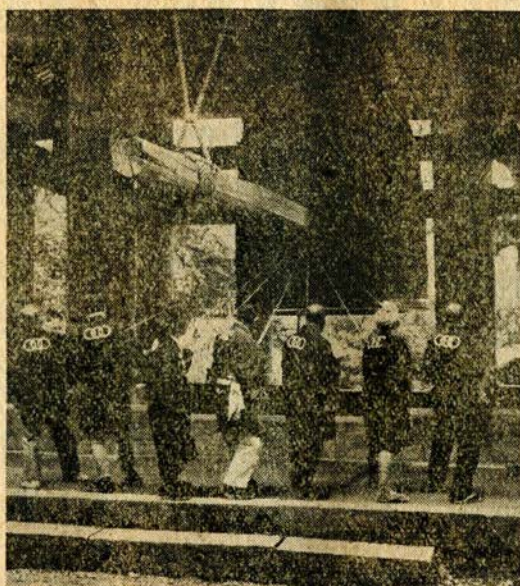
細井照道

洛東華頂山の麓なる淨土宗の總本山知恩院の
堀城に足運んだ自分である。幼にして寺に
入り、寺で育まれ、現に寺院に生活してゐる
自分の環境のみが、あながち人一倍自分を
知恩院に親まされてゐると思はれない。
い。春夏秋多四季とり／＼に山の色は變り、
樹々の装ひを異にするが、どこかに斯うした
時間的な變遷を脱して常住不變に似た如何に
も落ちついた莊嚴味のある此寺から感受する
氣持も好きだし、更に鎌倉、吉野、室町、安
土桃山、江戸の各時代から明治、大正、昭和
へと、開創以來七百六十餘年に及ぶ短くない
此寺の歴史を顧ふとき、夫々の時代の文化と
云ふか特色と云ふか、移りゆき過ぎ去つた時
代々々の香りを止めてゐるやうな氣がして、
貧しい自分の詩情をたまらなく揺り動かし、
ゆとりなき自分の心を落ち着かしてくれるの
である。さうやかな自分の宗教心を少しづつ
富ましてくれる事は勿論である。樓門高く
輕微を仰いで、朝恩下に普きに感泣し、賜
靈感夢の廟堂に佇みては開基法然上人の靈格
にふれ、宏壯雄靈なる殿堂に賽しては歷代護

持の洪範を偲び、僧長、發吉、家康等の深厚なる外護を願ふ者雖り自分のみではあるまい。蒼穹に響える老松古杉に、武人争闘の故事を尋ねてみたい心地がし、巖毎に枯れては芽をふき、死しては生さるものと知りながら、眞葛ヶ原の名もなき草や、大谷池畔の蟲の聲にも千古の史話が秘められてゐる様な気がする。

『京羽二重』の作者は、清水佛間、知恩、鐘色、鞍馬古樹、稻嗣紅葉、東山秋月、天台晴雪、獅谷群鷺、宏岩片雲、山階名勝、鳥野古松を擧げて洛陽十景と讃へてゐるが、京の春は除夜を告げる知恩院の鐘の音に明けゆく事靜も今も變りがない。高さ二丈八寸、徑九尺、厚さ九寸五分、重量一萬八千貫の洪鐘（寛永十三年鑄造）は、俗に知恩院の大鐘と呼ばれ日本三大鐘の隨一であるが、屈強の寺男が五人がかりで掛鐘も勇ましく撞き出す此鐘の音は、流石に諸寺の群鐘を壓して一際高く、東山に聳々とこだまし

て洛中洛外に春を告げるさまは實にや「起きて春めく知恩院の——」姿である。元旦修正會に始まり、天皇節祝聖會に終る春の行事は、毘沙門天法祭、紀元節祝聖會、御忌定式、



（大鐘重量一萬八千貫、高さ二丈八尺、徑九尺）

涅槃會、勅宣記念會、鐘西忌、善導忌、彼岸會、降誕會、灌佛會、東照宮忌、鳳詔頂戴、御忌大會の主なるものを始めとして數々ある

が、わけても年中行事の隨一として古來有名なるは開祖法然上人の御忌法會である。

保元の際に鐘を發して、くり展げられた源平争闘の繪巻は、王朝四百餘年の夢を破り、桓武天皇以來のさしも豪華な王城が兵馬の蹄に蹂躪され、花の都は、はかなくも嵯峨の巷と化した。殿上人の首が鴨の河原に曝され上皇の御身を以てさへ畏くも還幸となつた。鐘の聲に諸行無常の響きを開き、花の色に盛者必衰の理を悟らねばならぬ時代に於て、有爲轉變の世相を味ひ得たのは源氏の一族のみでなく、無常迅速の眞理を教へられた者は平家の公達のみではなかつた。形式を離れ、因襲を打破し、行詰りを打開して眞實に生命ある新しい宗教、貴族中心の弊風を脱し得る宗教、煩瑣にあらず直截簡明なる宗教、國民性にびつたり適合一致する宗教

が、轉換時代に生れんとする宗教として恰も乾ける草に燎原の火を待つが如き時代、大衆の靈覺を覺むが如き時機にあたり、専修念佛

の眞髓鮮かに淨土教の開宗を宣説したのが法然上人であつた。上人の言葉をかれば「淨土の教は時機を叩いて行運にあたり、念佛の行は水月を感じて昇降を得たり」選釋本願念佛集と、新宗教提唱に對する確固たる信念を披瀝されてゐるが、この時機相應と云ふか、水月感應と云ふか、社會の要求に即應して生れ出でたものには生き生命が約束づけられ、限りなき貴さがある。畏くも萬葉の君は玉の冠を傾け給ふて御受戒あらせられ、俗離高き一代の政治家九條關白兼實公も聞法信樂に時を惜しまなかつたと云ふから「勅修御傳」に「化導日にしたがひて、さかりに、念佛に歸するもの靈震の如し」と誌されてゐるのも諸ける。醇流の法藏や滅後の法藏などの試練の時代を力強く克服して、其の法流は四海に瀾漫し、門徒は八紘に垂布し、念佛の聲するところ法然の靈格は生き、念佛を口にする人々悉くが救はれる。誠に是れ苦海を渡るの通津、また長夜を照すの靈光であつたから、上は畏くも隆朝の敬崇を添うし、下は等し

く門徒の景仰慕を受けたのであるが殊に後醍醐天皇は淨土の法門に歸崇厚きを施へさせられ、大永四年正月、超譽花牛（知恩院第二十五世）に「願語を下し、京殿の門徒を知恩院に集め、一七晝夜開祖法然上人の御忌を修せしめ給ふたのである。勅に宣はく

朕聞抱流派者緬尋其源、靈枝葉者力培其根、蓋知恩教院者、淨宗創業道場、祖師人滅靈跡、遺教布于海內、屬利徧于國中、苟爲其末流者、寧可忘本源乎、自今而後、遇孟春月、宜令集會京畿門徒、一七晝夜修法然上人御忌也、追遠之誼想應若此、故茲詔示宜知悉矣

大永四年正月十八日

と。これを知恩院では「大永の御忌願語」と拜稱してゐるが、海に無窮の靈龍といふべく、これが一門の僧俗は勿論、京殿の人達にとつても縁り深き御忌法會の靈廟である。爾來每歲正月十九日より廿五日まで古式に則り嚴修されて來たが、明治十年以來は陰曆正月を改めて陽曆四月に當むこととなり今日に及んでゐるのである。

「京の風俗年中遊樂を事とす。知恩院の御忌を以て春の遊樂の始めとなす」とか、その昔、黒川道福の言葉も偲ばれる程に往古より今日に至るまで萬葉山の御忌法要は群衆で賑ふのである。「都名所事」に

正月十九日より廿五日まで圓光大師の御忌の法事あり、淨土一宗には觀まるといへどわけて四ヶの本寺には洛中洛外の末寺集りてとりおこなふ、糸竹の聲は紫雲のさそひらんじやのかはり道場にみたり、誠にねがひゑてはかの淨土に生れんといかばかりと云し、

と、その盛んなるさまを誌してゐるが、驚き張りの廊下三百間、紅紫とりゝの装ひも美しく群れ集ふ僧俗の姿は、去此不遠の淨土を描き、正に一幅の豪華繪卷である。「御忌の衣裝くらべ」とは誰人の言葉ぞ、自分は法然上人の一大靈格を遙して、各留半座乗華嚴を志す清純なる宗教的集ひに敬虔の念を禁じ得ないのである。

知恩院の古記録によれば、舊幕時代には年

中行事の一つとして花見の會が催され、毎年
曆三月三日前後に櫻花満開の頃を期し、門
主知恩院宮法親王は山亭（勢至堂書院）に成
らせられ所司代兩奉行等を招待せられたと云
ふ。今日でも櫻樹の數かなりあれど近年の増
殖にて樹若きの恨みあり「堀河の水」には

もとより此院に櫻數株あり、近き年、又三
門の前にあまたうへられて年々の春ごとに
藍木の花色をあらそひ、京の人々衣裝をく
らぶる事、うき世の外のこととす

と。又「京城勝覽」にも

此寺上にも中庭にも、下にも所々櫻多し、
下西になみ木の櫻あり、洛外にて此地と御
室との兩所に尤花多し

と誌しあり「雍州府志」には

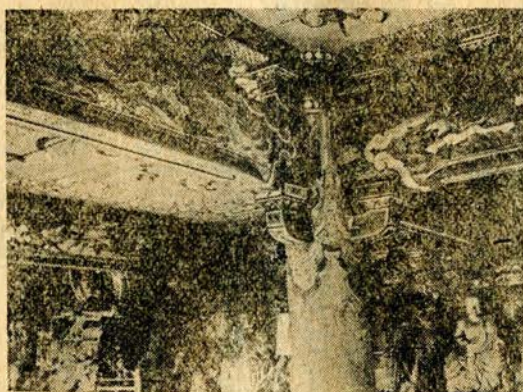
毎春櫻花爛漫之地也毎年公方家來臨多詩歌

會

と見へて知恩院古記録の趣きを裏書してゐ
る。三門の西、東大路通り一帯を櫻馬場と稱
してゐるが、この地は往古祇園の社地であつ
たのを延寶六年十月の頃に幕府に乞ふて、三

門前新道を拓き櫻樹をあまた植えたので此名
今に残つてゐるのである。

「花の頃遊覧の者并往來の諸人櫻花の枝狼
りに折取り是がため終には枯木と相成向も有



(三門 壇上の内部)

之風景を失し歎け歎けに御座候得共寺門の
手限りにては取縮向も行届難く候間何卒
名所御保護の爲格別御證書を以て花之枝折

取間敷禁札御府より御下渡し成下され候は
所々へ建置取縮仕度存じ奉候間此證

御聞届下さる様願奉り候也とは明治十年
三月廿四日知恩院から京都府知事へ願出た、

禁札下賜の願書である(知恩院日記)が、間
もなく櫻馬場通りに四本、總門通り四本、三

門前に三本、坂上に四本都合十五本の制札が
七萬三千四百二十二坪(現在の總坪數は五萬二
千八百七坪二斗五才)の廣大な境内に建てら
れたと寺傳してゐる。

面白い事はこの制札の定書で。

「現在境内櫻木枝折とる間敷背ものは一枝に
付百株所植付事 明治十年四月 京都府」

とありしか、現今の社寺などに散見する

制札に比べて雅味もあり、どことなくゆつた

りとした感じがするのも時代の相違による爲

めか。華頂山に櫻咲く頃ともなれば、曾て古

記録で讀んだことのある此制札を思ひ出して

微笑がましくなるのである。(つづく)



北方の西方淨土

(樺太の思ひ出)

生田 花世

本州人がつけたらしい地名を名とする譯とが入りまじつてゐる。

日本領樺太の西海岸の、人口八、三六九人の野田といふ町で、私の経験した事を書く。昭和十五年九月二十九日、私も「銃後講演」の一行は、泊居の王子製紙株式會社の泊居工場甲俱樂部を出發して汽車で、野田町に向つた。

泊居——竹根——幌千古——邊志保——杜門——勇部——近畿——鶴巢——邊宇氣——小岬——初志——久良志——伏邊——樺香——野田着。

明かに、アイヌのつけた地名らしい名をもつ譯と、幕末から明治年代にかけて移住した

から約四十里、久春内町（人口、三、二九五）まで、ハイヤーで終日飛ばしたので、一行は相當疲れたのだつたが、泊居、野田間は有難い事に、汽車なので、ハイヤーでの海岸路突破より、何かなし、氣が楽であつた。

右は、ソ聯の沿岸門が、水平線のかたにひそむといふ間宮海峡の中間部の波が打寄せてゐる。左には、原始林の丘陵がはてしなくつゞくのである。

昨夜降つた雪が山々を白く落つてゐる。吹く風は冷たい。邊志保あたりから、近畿、初志、野田の右側は、杜門岳、野田製紙の山塊が、ひとしく、雪をいたゞいて、天にそり立つてゐる。そのどこかに、熊たちがひそんでゐるのだらう……。杜門には、紅葉の名所の「白龍峽」といふのが、この奥にあるといふ立札が驛に立つてゐた。私たちは九月二十五日は、東海岸内路から、西海岸惠須取へとバスで、三十六里突進したときに、同じく紅葉の名所「白雲峽」の壯麗を十分瀟々してゐるので、およそ、「白龍峽」の壯麗を想像する事が出来た。

「白雲」といひ、「白龍」といふ人間のもつ言葉の中でもつとも清高な情懷表示であらう。レール近くの秋草の叢には、やさしくも桃色の石竹が咲き、名のしらぬ白い小菊がつながら咲く。一つのまろい丘の次に、又、まろい丘があると、その間は澤なのである。又、海へそぐ水流なのである。それが、いくつでも現はれ、次々に立去つた。人家とはなるところもあつた。鳥だけ木にとまつてゐるところもあつた。又、牛たちだけ突立つて、

迎年賦

岩野喜久代

かしこみて畏みてこの新しき年を迎へんあ
じあの夜明け

大いなる御代に逢ひたり民をして生くるも
死ぬも甲斐あらしめよ

臣道を全うせよと云ふ臣ら先づ見せ給へそ
の大きな道

不二の雪あしがらの雲古も今も光れる東
海の國

酒ほがひまろ寝をすべき正月に非ず歴史を
作るべき年

ああわれ等二千六百年の文化を繼ぎぬ前
途は無窮

滋瀝門を見守つてゐる
ところもあつた。とに
かく、やゝ無人島に近
い風貌さへ見せてくれ
る。賑かだつたのは鶴
巢といふ炭鑛地附近位
なものであつたのだ。

鶴の鳥はどこを飛ぶ
のか、惠須取と泊居の
間に、鶴城といふところ
があり、下つて、鶴

巢があり、又鶴巢があ
る。鶴の鳥のことがお

もはれ、ふと、東京の
東南の大島の鶴の鳥の
こともしのばれる旅の
思ひであつた。

車中に次のやうな話
をする人があつた。

『この邊へは、請負で
支那のクリーが來てゐ

た事もあるさうです』

『へえ！』

とおもつて、私も又聞きするのであつた。

『何しろ、樺太は、昔から人手がないんだか
ら、道をつくるにも、汽車のレールをしくに
も、家を建てるにも、一べん一べん、遠方か
ら人を連れて來なかつちやね』

『犧牲になつてくれた人々のおかげで、こん
なに汽車や自動車にのれて、もつたない、
有難い事ぢや……』

その人はざろりと私たちの方を見るのであ
つた。

『今は、いゝが……』と、もう一人が云つた。

『樺太の旅だけは相當旅費の餘分の用意がな
いと困る。いつかも、野田から國境の安別ま
でわしはしたゝか金をつかつた。天氣がわる
いと自動車が出ないからなア、その天氣がこ
れからは定まらないと來てゐる！』

『さうだ』

十一時三十分に野田町につくと、驛へは五人の工場の人が出迎へに来てくれた。私も銃後講演一行五人は、自動車につて工場の甲俱樂部に入つた。

工場の重だつた人々と、名刺交換をしたのち、サンルームの外側を見ると、こゝは高臺なので、窪地の町——といつても、この工場だけで出来てゐる社宅、商人の街が、見下される。

左右から山の肘がのびて來てゐる澤地なのである。

『まあ、このダリヤー！』

と一行の一人、歌人北見志保子さんが、サンルームの硝子戸外のダリヤーの大輪におどろいた。ダリヤーは色とりどりで、何れも、その大きさがあかんほの頭位あつた。

『ナニ、一輪づゝにしてあるから、大きいのですよ！』

と玉井丹といふお名の工場長は説明した。

こゝの工場長さんは、方々の工場長さんのやうに社交的でなかつた。

小ぢな人で、見るからに研究家然とした容貌の仁だつた。

一行が、サンルーム内側の部屋の御立のまへに集り、それに櫛がれたこの樺太の高山植物の花に見入つて、かれこれ云つてゐると、床の間の鏡戸棚から、作者の畫家がおいていた花の名入りの説明書を取り出して來て、秘が讀むからおぼへて行きなさいといふのであつた。

面白がつてみんなが花の勉強をはじめた。

『一番上のが(チヨウノスケソウ)……』

『これが、そんな名ですか？』

『さうです。その下が、杏桃』

『フレッツの事ですわ』

『フレッツです』

『トリップは』

『トリップはないわ』

『フレッツの實は紅くて、トリップの實は紫なのよ』

この間、豊原でおぼえた事も出して、めいめい云ふ。

『お次は、イワヒゲ、——お次はシコタンソウ、シコタンソー分りましたか？』

『はい、これです』

と、本島百合子さんが指さす。

『お次は、ヌブリオツメクサ、白い花です。その下はイワキキヤウ……隣がホソバイワギキヤウ横のがエゾツツジ……』

『エゾツツジは、塔路と惠須取の間の野で見たわ』

と私がいふ。次は、キバナシヤクナゲ、チンマキキヨウ、コマグサ、シタカヒナゲシ、ミヤムラサキ、深山紫、つて名、氣に入つた、と北見志保子さんがさうやく。カラフトツメグサ、キンロバイ、ミヤマオダマキ、ゴゼンタチバナ、チシマザザ、ホソバエゾリンドウ、ネムロシホガマ、ウメバチソ、ムカゴトラノオ、ビレオギク、エゾウスユキソウ、(略)

三

工場見學をした。木材がバルブとなり、次に紙となる製造工

程がよくわかつた。バルブ板を一枚もらふ。

これは、本州の人絹工場にまではされて、それがスフになるといふ事であつた。

やがて、晩餐となるといふ少しく前、

『ああ！ 樟太の落日！』

と北見さんが云ひ出し、

『もう十分すると——』

『早く山に上つて行つて見ませう！』

女三人は、庭に出て、裏木戸をくぐり、

「チシマザザ」の山の糸のやうな登りみちを

いそいで上り始めたが、心臓の弱い北見さん

は、『もうやめると云つて返して了つた。

のこりの二人は、

『見ませうね』

『もつと上の方へ行きませう』

『海が見えるそこまで』

「チシマザザ」をひつつかみ、ハア、ハア、

熱い息をしながら、ひたすら落日景観のため

にと、のほりにのぼつた。

『もういいのよ、こゝで！』

私の立止つた地點、そこは冷たい風の吹き

上げて来る野田裏山——つまり、野田裏山つ

ぎきの尾根の一つであつた。「チシマザザ」を

なほつかみ、這る足なをくめにして見渡す海

は、間宮海峡の大海面だつた。藍、藍、水

色、青色、青色、竹色、いろいろと、色が變

り、五澤、七澤、十澤、段々になつて碧洋た

る海の起始をつきつけてくる寂しい姿だ。今

その上に太陽が落ちはじめ。——九月二十

九日の崇巖大往生の姿がこれから始まる。

それは、「一日」の往生である。自然の、そし

て私達の……

西方淨土の徹底した悠久の明静さは、この

落日の——北の落日の光波の中にくみとられ

る思ひがした。水平線に、陽がつくと、キラ

と一點が閃光を發した……

四

『ムカゴトラノオ……どれか云つて御覽なさ

い』

翠朝逢ふ早々、工場長さんは、誰よりも早

く、高山植物の衝立の前に立つた。

『これです』

『いやちがふ』

又もや、袋戸懸から鉢の花の名書き入れの

説明書を取り出して、工場長さんはテストす

る。

とても熱心になつて了つてゐるのだつた。

私は、この勉強家の非社交的な、長いく

同僚師長をしてゐて、バツテキされて、こゝ

の工場長となられたといふこの仁の貴い魂

に頭を下げた。

野田工場は、試験工場で、いろ／＼の木材

をバルブにしてゆく上の新しい多方面の研究

をこゝでいつもしてゐるその事であつた。私

は、野田を後にして、こゝの壯麗だつた落日

の大觀と、工場長の眞摯さとを長く忘れる事

はないと、自分に云つた。それは、必ずや私

の臨終の時、即ち「西方淨土」の光彩であら

う。

願はくばこの光彩を死の瞬間の心にしよう

と私は祈つた。



話 童

最後の幸福

野 藤 井 亮 傳
水 昌 子 ゑ

如來さまは、おなさけ深いお方であつて、それ／＼お授けになつた運命についても一通りならぬ御心配をなさいます。例へば、「あの子にはあんなものを與へてやつておいたがそれから後どんなになつたらうかしら」「あの娘にはあんな道を教へてやつておいたが果して正しく歩いて行つてゐるかしら」

「如來様！ どうぞあなたのおなさを信じさせて下さい」

と、不平に清ち／＼た聲を耳にしました。

それはある村に住む三人の兄弟の聲でありました。貧しい兄弟三人のおの／＼に恵まれましたものは一人一本の桃の木と一反歩の畠でした。

二人が働きに出てゐるときは一人が留守番を交代にしてみました。こゝ二三年といふものは、日でありだの、永雨だの、雪がふつたり暴風があつたりして不作續きなので、三人

は毎日不平だら／＼だつたのです。

この聲をお聞きになつた如來さまは「自分はいつも正しい運命をそれ／＼與へてゐるつもりだが、それに間違はなかつたであらうか。若しも萬一間違つた運命を與へるやうな事があつたら、その人たちは、さぞ難儀してゐるであらう。難儀する計りでなく悪い習癖がつくやうにもなつてゐたら、それこそほんとに氣の毒だ」と御心配なさいまして、さつそく菩薩に

「今婆娑でこんな祈願をするものがある。ご迷惑だが三人の兄弟を誤べて下さい。もし今の生活より善い生活をする資格があつたらばその世話をして下さい。」

「あの男にはあんな苦しいことをやらしておいたが、妙にひねくれるやうな事はないかしら」

等とお考になります。丁度その日も如來さ

とおひつけになりました。

x

ある日のこと、その兄弟三人の所へ、辭は

髷ぼう／＼で、身體は垢じみたぼろ／＼な着物を着た汚い乞食が参りまして、

「私は三日程ろくに食物をいたゞきませんのでお腹がへつてたまりません。何か恵んで下さい、お願い申します。」

と食物を請ひましたので三人の兄弟は氣の毒と思つて、各が桃一つづつ與へてやりました。乞食はおし頂いてお禮をいつて何處にか行つてしまひました。

すると、その次の日、尊げなお坊さまが兄弟三人の所へ参りまして、こう云ひました。

「三人とも私について來なさい。

おまへ達によい仕事を與へて上げませう。」

そこで三人は早速に喜んでそのお坊さまに

ついて行きました。野原を越へ、森林を過ぎまた野原に出るとそこに大きな川が流れてゐました。そこで尊げなお坊さまは合掌して何



かお稱へになりました。さうするとそこには大きな倉庫がいくつも建つてゐて、中には大

きな酒樽がいくつも陳べてあり、多くの人々が酌いてゐるではありませんか。不思議なことに川の水はお酒となつてゐます。それは大きな酒を造る會社であるのです。お坊さまは第一の兄に

「おまへさんは此處の主人になつてこの仕事をやつて貰ひませう。」

と申しました。そして他の二人の兄弟をつれて颯い野原に行きました。しばらく行つてお坊さんは誰と同じやうに合掌して何かお稱へになりますと、何も無かつた茫漠たる野原に

そこには青々とした毛氈を敷いたやうな芝生の中に、牛や羊があちらこちらにたくさん飼つてあつて、鳩は空を飛びまはつたり餌を拾つたりしてゐます。向ふの方に大きな工場のやうな家があつて煙突からは煙が出てゆるゆると空になびいてゐます。それはミルクを取つたり、バターやチーズを造つたり、羊毛を産出したる大きな牧場でした。お坊さまは第二の兄をこの牧場の主人にして今度は末弟だけをつれて森の方に向つて行きました。

歩みながらお坊さまは末弟に

「二人の兄にはそれ／＼よい仕事を興へてよかつたが、今度はおまへの番だ。おまへは何を希望してゐるかね」

と申しましたので、末弟は恥かしながら心に思つてゐる本當のことを申し上げました。

「私は只美しい本當に善良なことを持つてゐるをもらひたいと望んでゐます」

これ程大切でこれ程むづかしい問題はありません。お坊さまは末弟に「お前の望む娘に結婚を申し込むがよい。決つとおまへの望みがかなへられるであらう」と申しました。

それから末弟は自分の望んでゐるやうな娘はゐないかと色々探してみましたが、しかし仲々これはと云ふ娘がみつかりませんでした。

ところがやつとのことで一人の立派な娘のゐることがわかりました。それはある國の王さまの娘で、美しく善良な心の持主のお方です。しかも今お嬢さんを見付けてゐることです。末弟は「身分の高い人には體も心も善良なものがあるのを聞きませんが、併し

精神が善良ならばこちらが如何に貧乏でも應じてくれるだらう」と勇氣を出して結婚を申し込みましたら、お嬢さんれになりましたが、その時末弟の外に隣國の王子から二人申込がありますので、先方ではどれに定めようかとお考へになつて、

「三人のお嬢さんが各々葡萄の枝を挿して、翌日蔓の出た枝を挿した者がお嬢さんになることにしよう」

と、定めました。そこで三人は葡萄の枝を挿しましたが翌日になつて隣國の王子二人が挿したのには蔓がでません。末弟の挿したのには蔓が立派にでましたので、お嬢さんになることになりました。

そして王女と末弟は林の奥の庵に行つて仲よく暮すことになりました。

末弟はかつてお坊さまの云つたことがこのことだと氣がついて、自分には妻とお家とを下さつたのだと知りました。

お淨土ではそれから一年が経つた時に

×

精神が善良ならばこちらが如何に貧乏でも應じてくれるだらう」と勇氣を出して結婚を申し込みましたら、お嬢さんれになりましたが、その時末弟の外に隣國の王子から二人申込がありますので、先方ではどれに定めようかとお考へになつて、

「三人のお嬢さんが各々葡萄の枝を挿して、翌日蔓の出た枝を挿した者がお嬢さんになることにしよう」

と、定めました。そこで三人は葡萄の枝を挿しましたが翌日になつて隣國の王子二人が挿したのには蔓がでません。末弟の挿したのには蔓が立派にでましたので、お嬢さんになることになりました。

そして王女と末弟は林の奥の庵に行つて仲よく暮すことになりました。

信仰は先づ健康から

吾邦は古くより鎖泉國として知られ、各種の重病患者にてこの大自然の恩恵即ち鎖泉温泉療法に依つて全治の喜びを得た方が全國を通じて多数にのぼつて居ります。之は或一種の冷鎖泉ですが内服、温布、浴用等にて左記諸症の難疾に非常な効果があります。

適應症

慢性胃腸病、胃潰瘍、神經痛、リヨウマチス、腦病神經衰弱症、心臟病、動脈硬化症、高血壓、中風、各種皮膚病等

既に全國多數の實驗者より多大の御高評を頂いて居ります。即ち居乍らにして療養同様難病を根治致します。お困りの方は「淨土」にて見た旨至急ハガキにて御申越し下さい。詳しく御案内申し上げます。

東京市王子區神谷町一ノ二七四 柳川欣三

尚平素持薬として服用致しますと前記諸症の豫防になり、一層健康を増進致します。

如來さまは日記帳を御覧になつて、再び菩薩に向つて、

「それあの一本の桃の木と一反歩の畑を持つ

三人の兄弟のことで、菩薩には乞食になつ

たりお坊様になつたり、いろいろ

と御苦勞をかけましたが、一

年たつた今でも彼等三人がある

やうな幸福を享けてゐることが

出来るかどうか、それとも又今の幸福す

ら樂しむ資格がないかどうか若しなかつたら

取捨てなさい」と、おいひつけになりました。

そこで又菩薩は乞食になつて第一の兄をお尋ねになり、いつ

かのやうにお慰みを願ひましたが、第一の兄は無情にも「何も

やるものはないよ」と、斷りましたので、もう一度「そ

んなことを言はないで、どうか何かいたゞか

せて下さい、腹が減つてたまりませんから」

と、お願ひしましたら、

「お前のやうなものは村に行つて芋の皮か鹿

の葉でも食べて居れば澤山だ。」

と、叱りつけて追ひ返しました。乞食は出て行くとな

ちまち氣高いお坊さまのお姿になつて合掌して何かお稱へにな

りました。さうすると今迄立派に立つてゐた穀稼かの倉庫も澤



山の酒樽も、そこで働いてゐた多くの人たちが
も掻き消すやうに消えて無くなつてしまひま
した。川は昔ながらの大川になつて流れてゐ
ます。何處からともなくこんな聲が聞こえて
來ました。

「汝は元の家へ歸りなさい。これから先決して不平を訴へてはならぬ。よけいなねがひごとをして如來さまにご心配をかけてはならぬ。汝はただあの一本の桃の木と一反歩畠を守りなさい。汝にはそれ以上の資格はありません。」

夕の鐘の音が靜かに響いて來ます。第一の兄は聲をあげてワ―と地に泣き伏しました。

菩薩はまた初めの乞食の姿になつて第二の兄の牧場を訪れました。そしてお慰みを乞ひ

ましたが、この第二の兄も第一の兄のやうに

斷つて叱りつけて何もやらずに乞食を追ひ返

しました。

すると乞食の姿は氣高いお坊さまの姿にな

つて前のやうに合掌して何かお稱へになりま

した。ところが今迄そこゐた多數の牛や羊

や空を飛び廻つたり餌を拾つたりしてゐた鳩や、大きい工場は掻き消え失せて元の園々とした野原となつてしまひました。そして又何處からともなく前のやうに誠める言葉が聞こえて來ました。『アー一年は眞實にはかない夢であつた』と第二の兄は泣き叫び地にひれ伏してしまひました。

ある日の夕方のこと、王女と末弟の居る山奥の庵に見馴れたお坊さんが尋ねて來て一夜の宿を願ひますと云ひました。二人は「こんな汚穢しい所ですがどうぞお泊り下さい」と心地よく承知してくれました。

二人は精いつばいの御馳走をしてお坊さんに上げたのは麦飯でしたが、お坊さんが食べるとそれは白米のご飯になりました。また番茶を出したのにお坊さんが飲むと牛乳になつてゐます。ご飯がすむとお坊さまはいつの間にか立派なだけだかいお姿と變り、合掌して何かお稱へになりました。そして二人に向つて、

「あなた方にはこれから大切な仕事をしてい

たゞかなくてはなりません。これからこの國の王様になつて下さらねばなりません。」と、言葉を残して二人の爲に



は夢にも忘れかねたなつかしい有難いお坊さまの姿がきえ失せました。

さうしますと汚穢しい庵はいつのまにかお堀や垣を圍らした、いかめしい門構の立派な

御殿となり山の林は静かな公園と變つてゐます。善良な心を持つ弟はさうして父母の世襲となり、父王も國民も喜びました。世の多くの人は貧乏は苦しいといつて金持にならうとしますが、果して金持になる資格があるかどうかを考へて下さい。中にはあの一本の桃の木一戻歩の畠さへも守る資格のないやうな人もたくさんあるでせう。

淨き 信仰坐談會案内

(一月)

一、日時 昭和拾六年一月十二日 午後一時

一、會場 本郷區東片町(白山上)七八

橋本 樂榮方

(電話小石川四九七六)

滿三周年記念の新年坐談會を催しますから、是非萬障御線合せ御家族御友人お誘ひの上御來會下さいまし。(會費不要、福引一本宛御持参願ひます)

○プログラム

一、念佛 二、宮城遙拜 三、おつとめ 四、默禱(皇軍感謝・英靈追悼) 五、講話 六、坐談 七、會食 八、清興(福引其他) 九、念佛 十、挨拶



病みぬけて話かけたく職を見

評 はじめての事なので、集句少なく、

其の内での快時です、美江さんは古

い有名で熱心な川柳家、我々の手本

としてよい方です。

調は可愛いより「情い」方が多い

しるもの、それに話かけた位なの

ではじめて病みぬけた事が生じる。

同じ人の句で、調たのしさがては母

と叫ぶ人と、があるが之は願かない

岩園市 長岡 白鶴

償つ直ぐに念佛の出る願冠り

評 前の句に比するとタツと落ちるが、

之より外に無いから仕方が無い、こ

の句はよく人間が出てくると思ふ、類

冠りで「調」を示して居る、念佛が

ピッタリ合ふ。

浄土御誓願だから言つて、佛教臭い

句ばかり詠むのはいいや、本當に自

分の心をきめて、其の類かい動き

をよんでいただきたい。即かれる木

魚は人を佛にし、とも一つ句をよこ

して居るが、私はイナに教訓あいた句

は授けられない。

子の便り亦讀み直し讀み直し

香川縣 日向 法月

浦和市 清水 美江

川柳もこうした處にまてくして居

られれば樂である。

もの、序であるが我々の川柳は漫

畫にはならぬ、これが私達の意氣で

ある。

句は無制限に送て下さい、私はその

方がすきだ。

王子區 三野 輪幸郎

死ぬことをよく知つてから幸にくる

わざとらしい感もあるが、それ

はコツチのひがみとして、無難なス

タツとした句であるもの、平凡た

るは免かれまい、悟りが出て、實

際そうした事實にはよく出合ふ。

原島縣 上原 四四人

懺悔した腹の底から御念佛

小樽市 平井 正念

屋根の下疊の上のお元日

福岡縣 丸山 千穂樹

時局下に薬はなせぬ恥づかしさ

鳥山町 萬壽 玄海

過失に母の言葉がやわらかい

樹木縣 大輪 清

鬱鬱の儘重ねて父の笑み

樹木縣 大輪 清

鬱鬱の儘重ねて父の笑み

樹木縣 大輪 清

清

小樽市 平井 善慈

吹雪行く野犬ひらりと響一つ

鳥山町 大輪 聖海

松樹越し見知つた月がなつかしい

土佐 横山 亮四

子の手様いきなり歎く父の聲

樹木縣 石下 仙空

慰問文子にまだ盡きぬ筆の先

福岡縣 丸山 千穂樹

ぎよつとさせ手を合はさるる不動尊

はがきに一面句敷に制限な

投稿規定

し「淨土」欄欄外欄外欄外

てに送ること。

石島吐月峯

子と理想語る懐しき炬燵あり

工藤湖子郎

嬰兒泣く停車場に付ち多知れり

角木 壽郎

陽が家にあふれ兒の木刀にうたる

森 聖

征く兵の決意は固き無表情

鳥谷 語大

わしも養子ですと養子の世話する

大山 一狂

農婦手を休めず汽車は日に幾度

樹木縣 大輪 清

轉染も承知世間ほうこういてる

本 設一

通路ちさく片かげりせる軒に沿ひ

三箇児 羅子

かたくかたくこの地の國信じたり

北村 雨垂

美しき嶺の山々なにか冷ゆ

川上 三太郎

この日本は金色の朝に朝まれり

樹木縣 大輪 清

まだ腹を立てる自分に腹が立ち

樹木縣 大輪 清

をとこありきよきにしろにさなれ

大森 不及

馬が尾を振つて振つてああ空知平原

清水 美江

木質宿ほりほり振いてまた寝入り

三浦 太郎丸

酢で生きた昔の日本橋

川上 三太郎

豆の豊取りついてから驚かせ

樹木縣 大輪 清

兒が笑ふただそれだけで遅刻する

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

樹木縣 大輪 清

法然上人

和歌註解(五)

安西覺承

なることであらう——。

阿彌陀佛と心は西にうつせみの

もぬけはてたる聲ぞすゞしき

できよう。天來の妙音とでも言はうか、實に一辭よく一首を覆ひてこの秀作を成すといった感がされるのである。

「感想」 古來秀作とされて來た歌だけあつてまことに渾然たる詞華である。例によつて懸言葉の秀れた技巧に感服させられるのであるが、特にこのお歌の生命は「もぬけはてたる」といふ譬喩的表現の活潑さ、適切さ、含蓄性にあるといふことが

〔語意〕

○うつせみ「空蟬」と「現身」とを兼ね、且「移す」の音を懸けてある。空蟬は蟬のぬけがら、轉じて蟬。現身は「うつせみ」「うつしみ」ともいひ、現在する身、生存してある身の意。○もぬけ「ぬく」の連用形、外皮を脱すること、蟬脱といふ熟語の意味に當る。舊き外皮を脱すれば清新なる中身が現れる筈である。

〔通釋〕

南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛と心は西方に移され打込まれて、あたかも蟬がぬくやうに、現實の罪惡生死の肉身から全く蟬脱しきつた聲のみが響き續く。その聲の何と爽かに清らかな

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心を

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人のこゝろにぞすむ

〔語意〕

○月影 影は「すがた」「かたち」、日月の場合その投影光——をも含んで意味する。この歌で、いたるのは月光であり、ながむるは空なる月と解してよいが、それらはもと／＼別のものでないことを忘れてはならない。○すむ「住む」と「澄

む」とを懸けてゐる。

〔通釋〕 月は遍く世界を照す。月光のさしいたらぬ里は何處といつてないのであるが、皎々たる月影も仰いでこれを眺めないものには映り宿るよしとてない。眺むる人の心にこそそれは宿り澄むのである……。

〔感想〕 これは淨土宗の宗歌になつてゐるお歌である。歌意は詞畫の光明遍照の文意を詠み表して餘すところがない。眞に大手腕のお歌である。殊に末句「こゝろにぞすむ」は意味が極めて微妙で、唱へ／＼て餘韻々々盡さざるものがある。いひ知れぬこの餘韻のうちに深く結ばれたる宗教と文藝の高き香りが漂ふのはあるまいか。

〔參考〕 この歌は續千載集卷十にも出てゐる。先出の歌で關係の想はれるものは、

かつ見れどとうとも有るかな月影の到らぬ里もあらじと思へば(紀貫之、古今集卷十七)

の歌である。慈鏡の

月はかな明石のうらも更科もたゞ見る人の心にぞすむ(拾玉集卷六)

は末句が同形であるが、慈鏡は上人より二十二年の後輩であり、上人に圓頓戒を受けて師事した人である點等から兩歌の關係は考へらるべきであらう。

三心の中の至誠の心

往生はよにやすけれどみな人の

まことのこゝろなくてこそせね

〔語意〕 ○よに「世に」で、世に取りわけて、殊のほかなどの意。○こそせね、こそと係つてねと結んだので、ねは否定の助動詞「ず」の已然形。せは動詞「爲す」の未然形。

〔通釋〕 極樂往生は世にとりわけてたやすい事ではあるけれども、誰でもがまことの心即ち至誠心を缺いては往生出来ないものである。

〔感想〕 至誠心は三心の隨一、善導大師によれば至は眞なり、誠は實なりで、即ち至誠心は眞實心である。三心は淨土宗の安心を三つの相から見た場合であるが、このお歌に於て、最も本質的な信仰精神としての至誠心——眞實心——まことの心——まごころといふものが端的に示されてゐて有難い。口稱念佛の一行に於て三心具足は宗徒必然の所期であり、三心即一は行はれゆく事實であると固く信ずるのであるが、何はさておき先づまごころである。まごころこそあらゆる價值ある精神的所産の根本をなすものでなければならぬ。



正しい信仰に導くには

問

淨土を見て感
激致して居る
者です。信仰實話「四人の純情」や和田氏
の地藏様のことや、石橋徳
作氏の地藏様建立のことな
ど有り難く拜見して居りま
す。それで地藏様建立に加
入する人とか淨土の愛讀者
などを募つて上げたいと思
つて、色々の會合の時など
に、その話をしたりお念
佛を心から申すやうにとおすゝめするので
すけれども、どうもお念佛を一緒に申す氣
になりませんが、その信仰の建て直しの話
を中村先生にお聞きして信仰相談のところ
に答をのせて下さい。

お念佛を申させる法についてお聞きしま

信仰相談

(質問歓迎)

擔當 中村辨康

す。お念佛を御寺へお詣りの人がとなへて
居ますが、信心の正しいお念佛でないから
それを建てなほしをしたいと思います。お佛様

にお經様を上げて居る時でも、勝手にお参
りのお方が話をするから困ります。お話
しの時でも勝手に邪魔になる相談などをし
て居ますが、それを何う云ふ風にして直し
たらよいか、中村先生にきいて下さい。私
は信仰の建て直しをしたいと考へて居るが、

何う云ふやうに導いたら、正しいお念佛を
申すやうになれるでせうか、教へて下さい。

(青森・平館・丸尾久一)

答

御同感ですが、中々むづかしい問題
です。私も年來さう云ふことにつ
いて苦心して居ますけれども、中々思ふやう
には行きません。と云ふのは私達の頭の中に

は色々の遺礙があつてそれが
始終出て来ますし、またそれ
には馴れて居ますから取り付
き易いし、程度が低いから分
り易いし、ついさうした安價
なところに落ち着いて居るの
です。だからそれを是正しな
ければ正しい信仰には中々な
れません。是れはいまに始まつたわけではな
く人間共通の事實です。其の上、私達は個人
主義であり、自由主義であり、物質主義であ
つて、随分手前勝手ですから、佛教では特に
自我の身見や、苦樂の邊見や、顛倒の邪見を
破らなければ正見に住することが出来ないの



で、先入主の見取見、迷信の戒禁取見と共に五つの代表的見惑として、これらの打破に努めて来たのです。然るに、何時の間に佛教がそれ自體の中にも色々な迷信的要素が巢喰ふてしまつて居ます。だからあなたの仰しやるやうな信仰の建直しは佛教それ自身にも必要される譯です。然し之れは申々容易な事ではありません。時代思潮や周圍の環境に支配されて居る私達は、此の周圍の信仰的な、こりて是正しない以上、餘程求道心の深い人でないと正しい信仰に入ることも出来ず、難信仰のまゝで吞氣な状態をつゞけて居るわけですから。

然らば何う導いたらよいかと云ふことになりませんが、結局求道心が強く起きるやうに導いて行くより外に方法がないのではないかと思ひます。法照禪師と云ふ人は「此身今生に度せずんば何れの生に向つてか此身を度せん」と言つて、再び人

身を得られるか何うか分らないから、今人の身を得て居る此の機會を逸せず、一心に道を求めぬいて解脱を得なければならぬと、眞劍に修養にいそしまれたさうですが、求道心の熾烈になることが、先決問題だと思ひます。従つて求道心を熾烈にするやうに反省を求め導くより外に方法はないと思ひます。一人

指方立相の信仰と神秘主義的信仰

問 (前略) 色々に信んだ擧句、理の彌陀と指方立相の彌陀とが一つに拜されるやうになりましたが、(中略) 心から佛に

時け給へと念じ得る以上、一切を上げて、一切の事に時け給へと念ずるは不正のことにあらず、随つて私の病を治し給へと念ずることが何うして不正なのでせう。友人の病を治し給へと念じて居る内に、精神上に神秘現象が起つて、例へば一ヶ月後に病氣が治ると云ふ暗示を如來から受けたとして

でも求道心のある人を得ればその人と協同して漸次其の仲間を殖やし、段々に環境を築き上げて行けば、其の環境に化せられて一村一部落の人達も段々正しい方向に向ふやうになると思ひます。無論不撓不屈の勢力がいりますが……

私が友達に一ヶ月後には屹度治ると告げても全然間違つた宗教行爲であるとか變態であるとか言はれないと思ひますが如何でせうか。常識を以て判斷すれば變態だと云はれるかも知れませんが、信仰的には是認してもよいではないでせうか、若しそれが悪いと言ふなれば、悪人救済のために開顯された指方立相のお淨土も變なことになるのではないかと思ひます。心だけを直して身體の方の病氣は食著しないと云ふやうな阿



説相仰信

彌陀佛ではないでせう。指方立相が信仰上は認されるならば、阿彌陀様が病氣に對してかう仰せられたと云つ

ても差支へないやうに思ひます。指方立相の淨土や阿彌陀様が是認される以上、かゝる神秘的な精神的暗示まで否認は出来ないでせう。常識では否認されても信仰的に肯定してよいのではないでせうか。右に關して御高示あらんことを御願ひ致します(後略)

(滿洲・奉天・西安・宮廟)

答

宗教には「神祕がない」と信仰になれぬ」とはよく言はれることですが、その神祕は大概小神祕であつて、宇宙の大神祕には目もくれないやうです。それは宛かも提灯の恩恵は感ずるが太陽の恩恵には何の感銘も起さないのと同様でありまして、要するに、小さいものには氣がつくが大きいものには氣がつかないのです。然し小神祕は變態で

す。兎もすれば社會的害毒を伴ひ勝たからです。また恩寵と云ふことも多くは慾望の満足で以て恩寵と感ずるやうですが、慾望の満足されない時にも恩寵を感じられなければ、是れ亦た手前勝手であり、變態であります。病氣が癒ると云ふことと、往生が遂げられると云ふことは、一應は共に自分の欲望のかねへられることであるから、往生淨土が正しいならば、治病と云ふことも正しいと考へられないこともありませんが、實にはその往生淨土も正しくはないのですけれども、その病氣が傳染病なぞであつた場合、隔離も消毒もしないで、如來様が何うかして呉れるであらうと信じたとして、平氣で細菌をそこら近邊にふり廻してよい筈はありません。常識で考へる正不正と信仰的に見る正不正とは無論全然同一でなく異つて居るのかも知れませんが、さればと云つて全然矛盾するものでもないでせう。一體常識と云ふものはその社會のレベルが低い場合には常識も低いのであつて、一定しては居りますが固定的なものでありませ

ん。同一人にしても社會認識が高くなり其人の智識が進めば常識もそれにつれて變遷し得る筈です。だから常識必ずしも絶對ではありませんが、先づ先づ常識で不正とされて居るものは、宗教だから信仰だからと云つて許される譯はありません。信仰行為は常識以上の特權を許されて居りません。社會の安寧秩序を破るやうな宗教行為は禁止されて居ります。イヤ禁止の如何に拘らず社會の安寧秩序を破るやうな宗教は正しい宗教ではないと思ひます。常識で變態だと認められるものは、信仰に於ても變態信仰だと思ひます。神祕的な處がなければ宗教的信仰にならぬと思つて居るところに、變態的なものが信仰では許されてよいと考へさせられて居るのではありませんか。普通人が神祕と考へて居るやうな神祕は本當の神祕ではありません。變態心理現象に過ぎません。狐つき、神おろし、呪術者など皆な同じやうな類であつて、そんなものは正しい宗教ではありません。疑似宗教です。よし假りに豫言が的中したところでそれ



が何です。千里眼的な力量があつたところでそれが何です。そんなものは畢竟人心をまどわす者であつて、此の社會から撲滅しなければならぬものです。社會への害悪にこそなれそれで本當に生死脱離の出来るものではありません。本當に其の人を高潔にするものではありません。正し信仰の上には絶対に許してはいけません。釋尊は「漏盡通」をこそ貴ばれました。漏盡通とは煩惱妄念を悉く無くなし盡したことで、漏盡以外の神足天眼天耳宿命他心等は皆な妄念増上の惡具でしかありません。漏盡を得てのちにこそ推獎されてよいのですが、漏盡なき五通者は皆な惡魔に過ぎません。昔し提婆達多が邪心を抱いて神通を摩得しようとしたが色々の人に斷られ、他心を得て居らぬ阿難から多少の神通を學び得たが、それは結局惡用されただけだったのでないですか。

それを含めあなたは「指方立相」と結びつけ

て之れを是認しようとして居るのはおかしいと思ひます。指方立相は決して神祕ではありません。一颯の思想、交際、言葉、物事、何れ一つ指方立相なくして表、現が出来ますか。一切の物心兩礙の證現象は悉く指方立相して居るのです。今淨土を説き阿彌陀を説かんとするに、指方立相なくして何うして表、現が出来るのですか。指方立相とは物事の具象化と云ふことです。理想的な境地を私達人間の心に於て諒解せしめんとする時、西方と説き十八圓淨と説いたこと、それを「指方立相」と云つたまでのものであつて、例へば私の家にある柱時計を旅行先で説明するとき、あゝなつてかうなつて覺ると云ふのと同じいもので、指方立相だから神祕だと誰が斷言出来るでせう。

あなたは「心だけを直して身體の瘴氣を直さない」のは片手落らしい口吻を以て「身體の瘴氣」を治すのを是認してよいと云はふとして居られますが、瘴氣の原因である不養生を、瘴氣を治さへすればもう決してしな

いと云ふ保證があれば兎に角、健康になれば直ぐ不養生を重ねるやうなことでは、瘴氣を治してやる甲斐もなく、却つてつけ上らせることになつて癖になりますから、寧ろ癖にウンと苦しませてコリ／＼させた方が愚癡と云ふものです。いづれにせよ、淨土の指方立相までを引き合ひに出して、無理にかゝる不正な行爲を是認させやうとするのは餘りに觀がよすぎます。

心の瘴氣は信仰に依つて癒りますからよろしいが、身體の不養生は瘴氣を治したからとて治りはしませんからむしろ無駄ではありますまいか。

と云つて私は決して信仰に依つて瘴氣が癒滅されず治癒しないと云ふものではありません。法然上人も「往生するほどの大事をすらなし遂げさせ給ふ。まして此の世にいくほどならぬ命を延べ、病を勝ぐる力ましますさんや」と云ふやうな御法語もある位で、功利的な意味でなく本當に如來様に身も心も打ち委せて居る身としては、この(五九頁へ續く)

淨友三週年記念感想文集

淨友三週年に當りて

○ 中村 辨康

私が「淨友の會」へ毎月出席するやうになつたのは、昭和十三年の二月初めでした。安養院の千葉師の御紹介に依つたものです。承ると橋本様は前年主人に先きたれて精神的な悩みを深く感じ、天理教や大本教や色々な宗教に走つたが満足を得られず迷つて居た

ところ、毎月先代の回向に來る名倉老僧から「淨土」の勝讀をすゝめられるまゝに讀んで見ると、色々教へられる點が澤山あるので、これこそ「自分の求むる宗教である」と感じ、鐵佛會發行の圖書を全部取り寄せて見たさうです。中でも「信仰讀本」にスツカリ感心して五十回ばかり繰り返へし、讀んだ結果、何うしても直接話を聞きたくなつて、お出でを願ふこ

とにしたのだとのことでした。

この眞劍に道を求められる御意度に感服した私は、萬障を繰合せて毎月四回程宛參上致しましたが一通り淨土教の信仰に就いての御話を了へたので、拙著「法然聖語讀本」を讀本として法然上人の御法語の御話を始めました。其内五六の方々がお出でになるやうになつたので、早く在京の諸友にも公開したいとの御申し出で、その案内を淨土誌上に載せるやうになつた譯です。然し月四回は多すぎますし、私もさう暇もないので、月三回として頂きましたが、最近

一ヶ年ばかりはなほ二回にへらして頂いて滿三年回数にして始めからでは百回位かと思ひます。之れ偏へに橋本様の御熱心さに引きづられたのです。會する方々も多少の異動はありましたが、皆な粒遺りでいい方ばかりです。御質問なども充分箇所を衝き且つ本當に眞劍な突きつめた問題ばかりです。それが爲に私自身がどんなに教へられたか分りません。非常に勉強にもなり、また啓蒙もされ反省もさせられました。恐らく同じやうなことしか申し上げて居ないでせうが、それでもよく倦まずにお集り下さるので、心ひそかに合掌して居る次第です。

之れも一面に會主橋本様の無我奉仕的な御親切と、千葉寛定氏の機まぬ司會と、幹事同信の方々の法然上人への眞摯な憧憬とに依る

もので、唯だた感謝の外はありません。今度満三周年のお正月を迎へて、有志の方々の感想文を紙上にのせたいとの議が起り、私にも何か書けと云ふことでしたから簡単ながら初めからの経緯をつらねて、此の機会に橋本様始め會員の皆様へ謝意を表します。そして皆様の御健勝を御祈り致します。

○ 千葉 寛定

學校時代に極めて居たので何とかして取り返し度いものと思つて居ましたところ、今から三年前の一月、檀家の橋本さんからしつかりした信仰を得たいが誰かい方

はないでせうかと相談しかけられたので鎮仰會の中村先生を御世話申すこととなり昭和十三年の二月から私も共に毎月四回づゝ坐談

會を開き勉強させて頂戴しました。

やがてそれを公開することにして三十人はかりのメンバーと御一緒に修養を續けさせて頂いたのがこの會であります。本年七月はからずも父を失ひ今まで氣にもとめて居なかつた寺門經營や復讐した生活苦に直接しなければならなくなりましたが、御蔭様で信念を養つて頂きましたので、今日どうやら其の難局を突破する事が出来さうです。これ皆な中村先生の御指導と橋本さんの熱心に道を求められた賜ものと深く感謝致して居ります。

○ 瀧口吉之助

「淨土」の愛讀者も全國には數萬おありのことと存じますが、私共は「淨友會」のお蔭で、親しく

中村先生の御親切な御法話を拜聴することの出来ますのは、誠に無限の喜びであります。

全國數萬の讀者は唯だ誌上を通じてのみ先生を知られるのでせうが私達會員は毎月同じ席上で、共に念佛し共に拜聴し共に語り合ひ得る光榮を得て居るのであります。これも偏へに此の「淨き友の會」の産みの親なる橋本様の御信心の御蔭で、實に結構すぎて地方誌友諸賢にはすまないやうに存じて居ります。會員への御待遇も至れり盡せりで、毎回御心づくしのおもてなしを頂いて居るのは本當に勿體ないことと思つて居ります。此の機会に満腔の謝意を開陳致します。

○ 關口 榮

淨友會が生れて三年になりま

ふとした機会に中村先生の御著「法然聖語讀本」を一讀しまして非常な感激を受けました。私が淨き友の會に入りましてからはまだ一年しか過ぎませんがその間御熱心な先生の御薫陶と、會員皆様の御教訓と、月二回の座談會に大層御世話下さいます橋本さんの御努力とによりまして、少しではありますけれども次第に法然上人の御言葉が分つて行く様です。昨日も今日も駄目だつたと虚しい悔の残らぬ張切つた一日を目指し、今後は堅實な一歩一歩を續けて行きたいと考へて居ります。

○ 石川巳之助

謹んで淨き友の會三週年をお迎ひして感謝致します。

す。今此の三と云ふ事で思ひ淨ぶ
のですが、佛教には三界とか、三
世とか、三寶とか、色々三つに
分けて御説きになつて居られるの
で、私も淨友會に就いて法、師、
縁と三つに考へて見たいと思ひ
ます。法とは申す迄もなく宏大無
邊の彌陀の大慈悲。師とは此尊い
教を俗人の私共の心から會得させ
て下さる恩師中村先生。縁とは橋
本様の誠私奉仕の御氣持に依つて
御作り下さつた淨友會。此の三
つが揃つて始めて私共が佛教の有
難さを知る事が出来たのだと信じ
て居ります。時まさに紀元二千六

百一年の佳き年を迎へて我が淨
友會も三年を経過し一層意義深
いものを感じますと同時に、恩師
の御懇篤なる御指導と橋本様の御
熱誠なる御努力とに對して心から
御禮を申し上げる次第であります。

古歌に「身をけづり人をば救ふ
すりこぎのこの味知れ
る人ぞ尊き」

とありますが、是ぞ橋本様のやう
な方のことを申すのだらうと存じ
ます。

○ 新井 嘉門

淨き友の會創つて早や三年。中
村先生の御人格を通じて温い佛
の慈悲心に接する事が出来まし
た。今迄の拜み信心や講話の丸吞
み信仰であつたのを理解による信
仰にして頂いたのです。此の間に
於ける橋本さんの徳まざる御努力
は實に感激に耐へないのです。念
佛の爲めの御精進御商賣、念佛す
る爲めの御生活がその御姿かと思
ひます。私はいつも思はず「お母
サン」と、喉迄出るのです。「温情

如春」私のいつはらざる告白で
す。

○ 江角 金市

私が二年前に妻を喪ひました時
の悲嘆哀愁は眞に言語に絶する程
深い大きなもので御座いました。
此の大きな苦痛から免れるには心
から敬服し得る宗教家の御指導に
依つて信仰に入る以外に無いと思
ひました。偶々御惠送を受けた淨
土話を通じて淨き友の會あること
を知り、橋本さんの心からなる御
好意に依つて中村先生の御熱心な
御法話を拜聴する光榮を得まし
て誠に嬉しく存じて居ります。淨
き友の會の座談會席上で屢々無幾
な愚問を申し上げましたが、其の度
毎に先生は何時も變らぬ御温顔を
以て極めて懇切丁寧に御解答して

下さいますので常に感激致して居
ります。御蔭様で臆氣ながらも生
死の問題が分つた様な氣がして、
昨今は故人に對する悲嘆の苦痛が
少くなりました。之れは年月の經
過の故も有りませうが決して夫れ
許りではありません。と申します
のは今でも時々哀愁の情が殆んど
當時の儘に起つて來る事がありま
すが、其時に先生から教へて頂い
た五蘊假和合のお話や、阿彌陀佛
の大慈悲力の御話など數々の信仰
上の御法話を想起しますと、非常
に氣分が樂になるからで御座いま
す、此の法悦の毎日を送る事の出
來るのは全く淨き友の會の御蔭で
衷心から敬意と感謝とを捧げて居
る次第であります。

○ 長藤佳吉 上田 竹松

尊き御念佛の功力に導かれまして私の様な初心の身で、中村辨願上人の御側近く御法話を拜聴し、いろ／＼と御指導を頂きましたことは身に餘る幸せであると感銘致しております。これ偏に橋本様御厚志の賜ものとたゞ／＼有難う御座いましたと御念佛と共に感謝の合掌するのみで他に餘念は御座いません。

橋渡す本ありてこそあひがたき
法の樂さ榮えゆくらん

○ 阿掛 保子

つたない筆ながら心に思ふ萬分の一なりと語らせて頂きます。橋本様に御世話になりましたのも、つい先き頃の様に思はれましたが早や三年にも成りました。當時私は年は取つては居りましたが本當

に世の中の有難味がわからず自分ばかりが不幸かとなげき暮して居りましたのですが、中村先生の御法話をだん／＼と伺ひ、又た橋本様のおやさしいお導きを頂くにつれ、段々世の中が明るくなり目がはつきりとして來ました。一つの物を買ふにも有難さが感じられ、またかたはの人を見ても、氣のどくに思はれ、家内の者が丈夫であるにつけても、有難さがしみ／＼思はれ、有り難い事のみが多くなりまして、自分の幸福を感謝する事が出来る様になりました。三年の其間、なんと申し上げてよいやら本當に種々御世話様になりましたがそれは言葉にあらはす事が出来ません。たゞ／＼感謝合掌するばかりでございます。合掌
流れに咲ける淨友の花

○ 吉田 耕作

私の母は一文不知ではありましたが、時所處縁を選ばず念佛の中に働き抜き此の世を去りました。お前も一時早く彌陀の本願を信じて念佛する人になつて呉れとよく聞かされました。其後五重相傳やら他宗新興宗教やら色々道を求めて見ましたが仲々私の氣持にピッタリ來ませんでした。ところが計らずも淨土誌で中村先生の御法話が橋本様の御宅であることを知つたので、御伺して見ると、親切丁寧な先生の講義や質問に對する御答へなどを拜聴しますと心に納得するものがありますし、また橋本様の御心づくしは私に取つて亡き母の再來かと思はれて心うれしく橋本様に盡すことこそ亡き母への孝養の萬分の一にもなるかと思ひました。(以下続)

(五五頁ヨリ)

念佛に精進しつゝ一人でも多く如来様の御めぐみに浴して喜び得る人を得たいと念願するのであつて、此の身體に傳道によりよき機關であるとの確信から、出来るだけ此の身を完ふしなければならず、事實そのからだがあればこそ聖業に精進し得るのであつて見れば、如来様もきつと歎つて見て居る譯はないと信じてよいと思つて居ます。

然し死も生も一切は如来様にお委せしたらよいではないでせうか、人事を盡くしてそれで及ばなかつたら、いづれ如来様のお思召のあることとせう。如来様は悪いやうにはして下さらないであらうことを確信します。



浄土宗の
第二祖

鎮西上人の生涯

大野 法道

一、法の力、人の力

浄土をめぐす念佛の大道は、法然上人によつて力強く説きだされてから、稻田をわたる金風のやうに、爽やかに人の心を打ち醒かせ、それから今日まで約八百年を通じて、日本の精神文化の上に太い線を引くことゝなつた。

何故にかくも廣く深く深く念佛が行はれたか。それには種々なことが考へられるであらう。第一に簡單であることが先づ挙げられるが、同時に心をこめて唱へるところに、必ず「これでよい」と不思議にも落付くことができる力のあることを見逃してはならない。この落付くことのできるのを望む場合は、忙しい世の営みに煩はされる中にも見出さる

べきであるが、何人でも一旦、死に直面した時、最も痛切に之を望むに違ひない。そして人は一度はこの關門を通らねばならないのである。

こゝに念佛に具はる自然のするどい傳播力がある。また念佛に徹頭徹尾生きぬく姿の尊さを、身を以て示された法然上人の大きな人格の力も、念佛が廣まる有力なる原因であつたことは言ふまでもない。

更に考へねばならぬことは、この念佛が浄土宗といふ佛教信仰の流れとなつて傳はつてきたことである。世の中にいつまでもものが續くのには、ぜひともそれに心を打込む人が顯はれて熱心に宣布することが第一條件である。いかに立派なものでも、それを身を以て體當りに受持つ人がなければ、遂に世の中から消えてしまふに定まつてゐ

る。まして人の心の感激に依存する宗教の信仰にあつては、その信仰に生きぬく人々が、次からつぎへと出てくるのでなかつたら、たとへば花火のやうに、一時はぱつと綺麗でも、間もなく影も形もなくなつてしまふに違ひない。但し後繼ぎが出るか出ぬかは、その道が本物であつて、宇宙の眞實生命がそれに通ふてゐるか居ないかできまることであるが……。

二、鎮西様の事歴

浄土宗といふ信仰の流れとなつて、法然上人の念佛が世に傳へられることゝなつたのは、それを受けつぐよき人を得たがためである。

そのよき人とは浄土宗の第二祖鎮西上人で、師の法然上人の念佛を正直に受けつぎ、それを第三祖記主上人にゆづり渡され、このやうにして師から弟子へと次ぎつぎに、丁度りレーに引繼がれる聖火のやうに、傳燈絶ゆることなく世を照すことゝなつたのである。

鎮西上人と申す名は、主として九州の筑紫地方で活躍されたからで、本名は聖光房辨長、また辨阿と號された。筑

前國香月の莊の御出生で、現今は炭礦で知られてゐる其地の福岡縣遠賀郡香月町に吉祥寺がある。二十二歳の壽永二年の春比叡山に登り、天台宗の學問を寶地房證眞法印について學ばれたのであつた。この法印は實に我が國の天台學者としては第一流の人物であつたから、英氣に満ちた鎮西様は心ゆくまで諸法實相の智劍を研かれたことであらう。それから故郷に歸つて居られたが、力強く湧きあがる求道の心せきあえず、三十六歳の建久八年に京の吉水の庵（今の智恵院のところ）に法然上人を訪つられたが、ただ一回の會談で上人に歸依し、弟子となつて修行を積み、翌年の春には師の上人から見込まれて選擇集をゆづり與へられた。

筑紫へ行つて教化を始めたのは、四十三歳の元久元年の夏で、それからは念佛の宣布に渾身の力をつくされたのである。その中には當時、地方で言ひふらされた奇怪な信仰を撲滅されたことがあり、淳正なる念佛のこゝろを記して、肥後の國往生院（現今は熊本市池田町）にて末代念佛授手印一卷を著はされたり、肥後の國、高良山の麓の厨寺で一千日の念佛會をつとめられたり。また同國山本の郷（現今は三井郡善導寺町）に善導寺を建て、大に教化を行

はれたりしたことなどがあつた。善導寺については前號に委しく紹介された通りである。

鎮西様は此寺で嘉禎四年閏二月二十九日に七十七歳の高齡を以て入寂せられたが、生前の教化は頗る盛んで、北九州の人々には今に至るも、尙ほその徳を仰ぎまつる心が動いてゐる。

滅後五百九十年、畏くも仁孝天皇はその教化の功を嘉せられて、「大紹正宗國師」の諡號を下賜あらせられた。皇恩の深大なるひたすら感激の極みである。實に鎮西様はこの尊號に見えるやうに、法然上人の念佛の正宗を大らかに受け紹いで、末ながく傳はりゆく淨土宗の流水を開導なされたのであつた。

三、教へられる數々

鎮西様の生涯には、教へられる數多くのものがあるが、今その中の二三について述べることとする。

鎮西様が始めて法然上人を訪づられた時の心構へは凄じいものであつた。それもその筈である。大學者について研ぎあげた智劍を提げて出た血氣さかりの三十六歳といふ

のであるから。

「法然上人とて大したことはないであらう。」

と自力に張り切つて、吉水の庵の門を叩いたのであつた。すると上人は、その道を求めて來訪した由を聞かれて徐ろに、

「天台を學んだと言はれるなら、三重の念佛について話ませう。」

と、天台大師の摩訶止觀の念佛、慧心僧都の往生要集の念佛、善導大師の唱へられた念佛のこゝろを委しく語られたので、鎮西様は其場で念佛の有難さがわかつて、上人の弟子となられたのであつた。

この會談について肝心なことは、上人の御話の三重念佛の急所であるが、古書にはどういふ風に話されたか少しも記してないので知る由もない。今ひそかに推察することが許されるなら、止觀の念佛は實相の理念を擬す助けに念佛するを教へ、要集には重要な正行として念佛を説き、善導大師は佛力のこもる六字を唱ふる念佛であることを御説きになり、しかも唯その念佛の見方が變つて行つたことだけでなく、その變りゆく筋道は、即ち人間の心が本當に落ちつけるやうになる段階であることを明らかにして、人間

の眞姿を手取るやうに見せられたのであらう。
幾重もの假面を脱ぎ取つた人間の眞姿の見えた時ほど嬉しいことはない。鎮西様が上人の門に入られたのは、この人間の眞姿に、もはや心の逃げ場所がなかつたからであらう。

更に教へられることは、初めの鎮西様の物凄め心構へは、自力を恃んで憍りたかぶる高慢痴氣のやうに見えるけれども、實は眞面目に積んだ修行から來た自信であつた。さればこそ上人の懇ろな御話に心が動いたのである。もし橋慢であつたなら、それは唯狭い自分だけの天地に閉ぢこもり、廣い世界を見る眼を失つてゐるのであるから、話を聞いても心の中へ道入らなかつたであらう。自信は橋慢とは違ふ。人間に本當の落付きを與へる眞實の道を教へられて、それにうなづくことができたのは、どこまでも伸びゆくことを終束する謙虛の心があつたればこそである。
鎮西様は師の上人を尊んで、
「わが大師釋尊は、たゞ法然上人なり。」
と申されたのであるが、この一語に顯はれる絶対の信頼を持たれたことは、確かに人間の本當のけだかい姿であると思ふ。

師を信じた極言として、親鸞上人が、たとへ法然上人にすかされて地獄に落ちて悔ひることはないと言はれた言葉は有名であるが、鎮西様の此一語はそれに通ずるものがあり、しかも言ひ表はし方が過激でないだけに、師を仰ぐ純情の滋味滴るが如き感じのする、忘れることのできないものである。(以下次號)

☆ 陸海軍病院慰問淨土 寄附芳名 ☆

十二圓九十五錢	府下小笠原島母島	清見寺
五圓	北海道札幌郡藤崎村	佐藤豐平
一圓二十錢	大阪市天王寺區堀越町	柳川ユキノ
二圓二十九錢	神奈川県高座郡六倉村	善然寺
六圓	奈良市法蓮町	日野西德寶
一圓二十錢	山口縣吉原郡井關村	田中茂子
五圓	愛知縣中島郡明治村	長善寺

編輯後記

◇新年あけましてお目出度うござります、會員各位から一方ならぬ御厚情をいただき厚くお禮申し上げますと同時に今後とも何分の御後援を下さらんことを幾重にもお願い申し上げます。

◇昨年は本部の陣容をすっかり建て直して、法然上人の御遺徳宣揚と御遺訓に基く眞率な生活實踐の普及徹底を期し、宗祖御神は淨土教徒は勿論のこと同教の人々の努むべき當然の任務であるとして、二千六百年の佳き年にふさわしい努力をして來ました。

◇而して多少ともその実績が舉り、會員の數も漸増して、目下連日新會員の申し込みが殺到してゐる有様ですが、本年も亦昨年に引續きお國のために、そして宗祖の

ために専心努力させていたたくつもりでゐます。

◇京都に支局が出来ました。早くから懸望されてゐたものだけに會勢伸張のあらはれとして一同感謝してゐます。この支局設置は全く増上寺法主大島徹水大僧正のお骨掛りによるものであり、今後とも直接支局を御指導下さることゝなつてゐますので、皆さまと共に大島臺下に深謝いたしたいと存じます。

◇吉田絃二郎先生の玉稿は先生の肚からついて出る御隨筆だけに深く味讀されるものばかりです。

◇佐藤春夫先生はこれまで連載せられた「阿彌陀さま」は、先生にとつて不満の點が多いとの由で今度更に新たな御感慨の下に書き續けられるとのことですから、何うぞ御期待下さい。

◇大島臺下の「庵主と佛師」と和田博士の「病氣と信仰」は何れ

も過般の誌友會で御講演下されたお話です。和田博士の多くの病床上の御實驗から唯物的な醫療では病氣はなほり難いとの結果は意義深いものがあります。

◇「淨土三周年記念感想文集」は淨土友の會員の心からの感想で、同會はこれまで支部として實踐の上に最もよく活躍せられて來たものの一つで變らぬ努力に敬意を表します。

◇大野法道先生からは淨土宗の第二祖第三祖のことで數回連載の玉稿をいただくことゝなつてゐます。宗祖の御信仰を味ふためには兩祖のことをよく知らなくてはなりません。

◇北條春光、生田花世兩氏から玉稿をいただき深謝いたします。

◇會員申し込みの方法は住所氏名を明記の上で一年分の會費を納入下されば結構です。

◇會員の御住所變更の場合は前住所も合せ御通知下さい。

淨土 一月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五年五月三日印刷納本
昭和六年一月一日發行
(定價十二錢)

東京市芝區芝公園五號地一〇
編輯兼 眞野 正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人贊仰會
東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

② (送料五厘)

會費 金一圓二十錢

一ヶ年 (送料不要)

大正大
學教授

大野法道

本會
理事長

中村辨康

關西大
學教授

前田聽瑞共著

淨土宗讀本

淨土宗の教義、信仰、歴史、實際！ 即ち淨土宗がその中に持つ凡てのものをだれにも解るやうに、しかも立派な體系のもとに説いたのがこの「讀本」です。著者は現淨土宗が誇る第一流の理論家と信仰家で、後世に残る定本とするために共力してなつた苦心練磨の結晶です。管長郁芳隨圓貌下は序文を、金戒光明寺法主望月信亨台下は表題を進んで御染筆下された教界の指導的讀本です。三度び版を重ねてなほ足らざる賣行はまた本書の眞價を實證してゐます。

發行所 法然上人鑽仰會

東京芝區芝公園 明照會館
振替東京 八二一八七番

菊判四五〇頁・總クローズ裝
本文五號 挿繪數 葉 入
定價 二圓五十錢
送料 二十一錢
(朝鮮・臺灣・滿州・樺太四十九錢)

第一編 歷史

第一章 釋尊の生涯

第二章 佛教の發達

第三章 法然上人傳

第四章 二祖から現代まで

第二編 教義

第一章 淨土の教義

第二章 信仰の對象

第三章 西方の淨土

第四章 信仰の獲得

第五章 念佛の意義

第六章 信仰の生活

第七章 念佛と日本精神

第三編 實踐

第一章 生活要素としての念佛

第二章 信仰を方向づける爲の宗派と寺院

第三章 寺院の構成及び機能

第四章 信仰修養に必要な諸準備

第五章 信仰修養法としての行儀

第六章 人生の最大儀禮

第七章 祖先への報恩行

第八章 信仰増進の方法

『淨土宗讀本』内容

法然上人鑽仰會刊行圖書(一部)

東京市芝區芝公園明照會館
振替口座東京八二一八七番

中村 辨康 著

(四六版一三〇頁總ルビ付)

法然上人の信仰生活

定價三十錢
送料六錢

中村 辨康 著

(四六版八〇頁總ルビ付)

信仰讀本

定價二十錢
送料三錢

藤井 實應 編

(菊半截一四四頁總ルビ付)

法然上人法語抄

定價三十錢
送料六錢

佐藤 春夫 著

特製ノート型、天金
十二ボ総ルビ、三〇〇頁

法然上人
別傳 掬水 譚

定價四圓五十錢
送料二十二錢

◇御注文には小爲替または送金と通信とを兼ねた振替利用が御便利で

す。
◇送料をお忘れなきやう願ひます。
◇端書での御注文はお断り致します。

上人が萬人と共に悩み求められた信仰求道の生活を軸としそれを廻る時代の種々相を描いて何人にも納得の行くやうに親切丁寧に説かれてゐる。一讀信仰の眞隨にふれよ！

非常時局下、人心の確固たる統一を期する時、一道の光明燦然として信仰の正道を指し示す。萬人のための宗教、淨土教の信仰を説くこの書こそ現代人が信仰の書。

信仰の珠玉凝つて一卷をなす。浩瀚なる上人御遺文中より、現代生活に最も適切なるものを選んだ句々金玉の聖句、これぞ生活の根底である。

大毎、東日兩紙に連載し百萬讀者を魅了した當代隨一の宗教文學、高き藝術の香氣と深き信仰の把持、小杉放菴畫伯の氣品高き挿畫と相まつて一大美術品！

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十五年十二月廿日印刷納本 昭和十六年一月一日發行

淨土第七卷第一號

(停)

定價金十二錢 (送料五厘)
滿鮮臺灣等
外地定價金十三錢